KH589-H263
1200404217284

新註

草

枕

東京精文館藏版

KH589-H263

I種
W
1200404217284

余が草枕

一體、小説とはどんなものか、定義が一定してゐるのか知らん。

見た所、世間の眞相を穿つたものを書く心理小説とか、一つの哲理を書き現はす傾向小説とか、主として時代の弊のみを發く一種の傾向小説とか、又は、走馬燈の如き世間の出來事を、何のプロットもなしに其まゝに寫し出すものとか、その他いろ〳〵の種類はあるが、是等、普通に小説と稱するものの目的は、必ずしも美しい感じを土臺にしてゐるのではないらしい。汚なくとも、不愉快でも、一切無頓着のやうである。唯世の中の人間はこんなものである、世の中にはこの位汚いことがある、こんな弊がある、人間は斯くまでに恐しいものであるといふことが、讀者に解りさへすればよいのらしい。もし其上に、ある感じを與へるとすれば、それはかうでもあらう。卽ち、だから人間は働かねばならぬ、正直でなければならぬ、惡い者には抵抗して行かねばならぬ、世の中は苦しいけれども忍ばなければならぬ、物事は齟齬して失望落膽は頻に到るが常に希望をもつて進んで行かねば

ならぬ、と。要するに　世の中に立つて、如何に生きるかを解決するのが主であるらしい。

若し假に、これのみが今の小説であるとすれば、美を描くといふ主意はいらぬ。唯眞を寫しさへすれば、たとひ些の美しい感じを傳へなくとも構はない譯である。

けれども文學にして苟も美を現はす人間のエキスプレツションの一部分である以上は、文學の一部分たる小説もまた、美しい感じを與へるものでなければなるまい。勿論定義次第であるが、もし此定義にして誤つて居らず、小説は美を離るべからざるものとすれば、現に美を打ち壞して構はぬものに傑作と云はれるもののあるのは、可笑しい。私はこれが不審なのである。

私の草枕は、この世間普通にいふ小説とは、全く反對の意味で書いたのである。唯一種の感じ、美しい感じが讀者の頭に殘りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロツトもなければ事件の發展もない。

茲に、事件の發展がないといふのは、かういふ意味である。——あの草枕は、一種變つた妙な觀察をする一畫工が、たゞ〳〵一美人に邂逅して是を觀察するのだが、此美人即ち作物の中心となるべき人物は、いつも同じ所に立つてゐて少しも動かない。それを畫工が、或は前から、或は後から、或は左から、或は右からと、種々な方面から觀察する。唯それだけである。中心となるべき人物が少しも動かんのだから、其處に事件の發展もやうがない。

所が普通の小説ならば、この主人公は甲の地點から乙の地點に移つて行く。即ち其處に事件の發展がある。此場合に於ける作者は、第三の地點に立つて事件の發展して行くのを側面から觀察してゐるのだが、草枕の場合はこれと正反對で、作中の中心人物は却つて動かずに、觀察する者の方が動いてゐるのである。

だから、事件の發展のみを小説と思ふ者には、草枕は分らんかも知れぬ。面白くないかも知れぬ。けれども、それは構つたことではない。私は唯、讀者の頭に美しい感じが殘りさへすれば、それで滿足なのである。若し草枕が、この美しい感じを全く讀者に與へ得ないとすれば、即ち失敗の作、多少なりとも與へられるとすれば、即ち多少の成功をしたので

ある。

また、私の作物は、やゝもすれば議論に陷るといふ非難がある。が、私はわざとやつてゐる。

もしもそれが爲に、讀者に與へるいゝ感じを防げるやうではいけないが、これに反して、却つて、是を助けるやうならば、議論をしようが何をしようが、構はんではないか。要するに、汚ないことや不愉快なことは一切避けて、唯美しい感じを覺えさせさへすれば、夫でよいのである。

普通に云ふ小説、即ち人生の眞相を味はせるものも結構ではあるが、同時にまた、人生の苦を忘れさせて慰藉を與へるといふ意味の小説も存在していゝと思ふ。私の草枕は、無論後者に屬すべきものである。

此の種の小説は、從來存在してゐなかつたやうである。また多く書くことは出來ないかも知れぬ。が、小説界の一部にこの意味の作物もなければならぬと思ふ。

分り易い例を取つて云へば、在來の小説は川柳的である。穿ちを主としてゐるが、此の外に美を生命とする俳句的小説もあつてよいと思ふ。尤も、在來の小説の中にも、此分子が全然無いと云ふのではない。いかにも美しい感じを與へるやうな所もあるが、それが主になつてはをらぬ。汚いものをも避けずに平氣で寫してゐる。

で若し、この俳句的小説――名前は變であるが――が、成り立つとすれば、文學界に新しい境域を拓く譯である。この種の小説は未だ西洋にもないやうである。日本には無論ないへるのである。夫が日本に出來るとすれば、先づ、小説界に於ける新しい運動が、日本から起つたと

（明治三十九年十一月「文章世界」）

新註草枕

目次

一　山路……一
二　峠の茶屋……二〇
三　宿の一夜……三八
四　朝の宿……五九
五　髪床……八二
六　春の夕……一〇三
七　浴槽……一二二
八　茶席……一三六
九　小説讀み……一五五

一〇 鏡が池……一七二
一一 觀海寺……一九〇
一二 春の丘……二一〇
一三 川舟……二三六
附錄
一 作者略歷……一
二 森田氏への書簡……五

新註 草枕 目次終

新註 草枕

一

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒兩隣りにちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住

〔智に働けば云々〕人間の精神活動を客觀的方面卽ち智・主觀的方面卽ち情・意に分け、その何れに偏しても、圓滑にゆかぬ意を述べたもの。

〔住みにくいと悟つた時〕此一句は作者の藝術發生觀を緊縮したもの。

〔越す事のならぬ世云々〕此一節は作者の藝術觀の一面を述べたもの。

〔天職〕天子の職は天の命に由るので、天子自らの專有ではないといふ思想から、天子の職といふのであるが、轉じて、天の命じた職業の意。

〔難有い世界〕美しい樂しい世界をさす。

〔璆琳〕璆も琳も共に玉や鈴の觸れて鳴る聲。璆琳の音は、金石聲と同意、詩文の勝れて立派な格調。

〔靈臺方寸のカメラ〕靈臺は魂のある所、即ち心。方寸は一寸四方の面積、心の意。心が外界の事象を映すのを、寫眞機の暗箱に譬へて、斯く言うたもの、良心の苛責を鬼に比して、心の鬼といふと同巧。

〔澆季溷濁の俗界〕澆季は風俗の輕薄となつた季の世。溷濁は人情のにごり汚れたあさましい世。

みにくいからとて越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行く許りだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容て、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き拔いて、難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である、あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば、寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも璆琳の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自から心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩

〔尺縑〕僅かな絵絹。

〔不同不二の乾坤〕絶對無二の天地。至高至貴の詩美の世界をさす。

〔千金の子〕センキンのシ。富豪のこと。史記「千金之子不レ死二於市一」

人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人世を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、――千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも、幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。――喜びの深きとき憂深く、樂みの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片付けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば寢る間も心配だらう。戀はうれしい。嬉しい戀が積れば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかろ。閣僚の肩は數百人の足を支へて居る。脊中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。

〔すはや〕「すは」は、俄に事の起つた時、驚いて發する感動詞。「や」は感動詞。

〔肩にかけた繪の具箱〕此句によつて、作の主人公が繪をかく人であることが暗示されてゐる。「繪の具箱が……躍りだした」は擬人法。

〔だんだら〕だんだら染。横の筋を異なつた色に染めた染模様。又は、幕などの一布づゝ異つた色を縫合せたもの。こゝは山櫻が青い常磐樹の間に點々と咲いてゐるをいふ。

〔眉に逼る〕目の前に高く立つてゐる。

〔巨人の斧で削り去る〕造化の巧みな細工をいふ。

少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考がこゝ迄漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなつた。平衡を保つ爲めに、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に卸りた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍りだした丈で、幸ひと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向ふを見ると、路から左の方にバケツを伏せた樣な峰が聳えて居る。杉か檜か分からないが根元から頂き迄悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續ぎ目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然（はつきり）りして居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るだらう。路は頗る難儀だ。

〔七曲り〕幾回となく折れ曲がつてゐる道。羊腸。

〔空氣が一面に蚤に刺され〕春の生温い靜穩な空氣が、雲雀の細く鋭い聲に刺戟されて、いら〳〵と搔き擾される趣を表現したもの。

土をならす丈なら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲めに道を讓る景色はない。向ふで聞かぬ上は乘り越すか、廻らなければならん。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、丸で一間幅を三角に穿つて、其頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより川底を涉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶら〳〵と七曲りへかゝる。

忽ち足の下で、雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居

たゝまらない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もないのどかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ氣が濟まぬと見える。其上どこ迄も登つて行く。いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭どく廻つて、按摩なら眞逆樣に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛び上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も上る時も、また十文字にすれ違ふときにも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の聲を聞いたときに魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた所だけ諳誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其二三句のなかにこんなのがある。

〔鳴き盡くし云々〕漸層法と疊句法とが用ゐられてゐる。

〔雲雀は屹度云々〕美しい詩的空想である。

〔按摩〕盲人をその職業によつて表はしたもの。

〔雲雀はあすこに云々〕再び雲雀に低徊し初めた。

〔十文字に云々〕時鳥なくや雲雀の十文字（去來）

〔シエレー〕Percy Bysshe Shelley（1792—1822）十九世紀前半に於ける英國の抒情詩人。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

〔前を見ては云々〕 "To a sky lark" の十八節である。此詩は全體が二十一のスタンザから出來てゐ初の數節では、夜明けと夕暮に於ける、雲雀の音と四邊の風物の調和を歌ひ、次の數節では、雲雀の聲の美しさを、螢・薔薇・春雨・少女の戀・などに喩へて歌ひ、次には、人間と比較して、雲雀の囀りが徹底的の愛と歡喜とに滿ち、少しも疲勞哀愁を伴はぬことを怪しみ、畢竟それは解脫大悟から來てゐるのであらうと述べ、然るに人間は前を望み後を顧みて常に空虛な幻影を求めてゐる。時には心から笑ひ、甘い歌に陶醉しても、其歌の底に苦惱哀愁が潜んでゐると歎き、最後に、雲雀よ汝歡喜の半を吾に分かて、然らば世人をして吾が調べに傾聽せしめる事が出來ようと結んでゐる。

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ、腹からの、笑といへど、苦しみの、そこにあるべし。うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想ひ、籠るとぞ知れ」

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜びを歌ふ譯には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などと云ふ字がある。詩人だから萬斛で素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあらうが、無量の悲みも多からう。それならば詩人になるのも考へ物だ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の樣な葉が遠慮なく四方へのして眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座して居る。呑氣なものだ。又考へをつづける。

〔萬斛〕 斛は十斗。
〔凡骨〕 凡人。
〔鋸のなかに〕 鋸形の葉の中に。

〔詩人に憂は云々〕 此節以下は、作者の所謂餘裕文學、低徊趣味の主張である。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍る許りだ。蒲公英も其通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只此景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上、地面を貫つて、開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする了見も起らぬ。只此景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ

〔地面を貫つて云々〕 次の「鐵道を云々」と同じく、實際の利害感情である。

〔陶冶〕陶工が器を作り、鍛工が金を鑄るやうに、人才を育成すること。
〔醇乎〕まじりけのないこと。

〔棚へ上げて〕此句は今日無反省の狀態を非難するに用ゐるが、爰では、捨て置いて顧みない。無關心なこと。「わが年を棚へ上げてやわか戒」（芭蕉）

此景色が、景色としてのみ、余が心を樂ませつゝあるから苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

戀はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩んで仕舞ふ。從つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲めには、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。第三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を讀んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免かれぬ。苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりする。取柄は利慾が交らぬと云ふ點に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりは餘計に活動するだらう。それが嫌だ。

〔飽々した、飽き〳〵した〳〵〕尻取文句、即ち連鎖法の詞姿である。

〔理非を絶した〕道理と非道とを超越した。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き〳〵した上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する樣なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるのだけで用を辨じて居る。いくら詩

〔詩歌の純粹なるもの〕劇詩・叙事詩に對して抒情詩をさすのであらう。
〔浮世の勸工場〕現實世界のこと。

的になつても地面の上を馳けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣りの娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。悠然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不如、明月來相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。此乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船、汽車、權利、義務、道德、禮義で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寢込む樣な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を讀む人もみんな、西

〔採菊東籬下云々〕陶淵明の飲酒の詩「結レ廬在二人境一、而無二車馬喧一、問レ君何能爾、心遠地自偏、採二菊東籬下一、悠然見二南山一、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此間有二眞意一、欲レ辯已忘レ言。」南山は廬南山。「有二眞意一」は眞情の流露するものあるをいふ。

〔出世間的〕超俗的。

〔獨坐幽篁裏〕王維の竹里館の詩。五言絶句。幽篁は靜かな竹藪、

〔長嘯〕聲を長くしてうそぶく。

〔相照〕互に心を示し合うて隱さぬこと。

〔別乾坤〕別天地。

〔不如歸〕德富蘆花の作。

〔金色夜叉〕尾崎紅葉の作。

洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を浮べて此桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らんから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようと云ふ心掛も何もない。只自分にはかういふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも藥になる樣に思はれる。フアウストよりも、ハムレツトよりも難有く考へられる。かうやつて、一人繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ〳〵あるくのも全く之が爲である。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寢た男でもなからう。矢張り餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ

〔扁舟〕小舟。蘇軾の前赤壁賦「駕二一葉之扁舟一」史記「乃乘二扁舟一浮二于江湖一」

〔桃源〕俗世間を離れた別天地。陶淵明の桃花源記「晉太元中、武陵人、捕レ魚緣レ溪行、忘二路之遠近一、忽逢二桃花林一、夾レ岸數百步、中無二雜樹一、芳華鮮美、落英繽紛、漁人甚異レ之、復前行欲レ窮二其林一、林盡二水源一、便得二一山一、山有二小口一、髣髴若レ有レ光、便捨レ船從レ口入、…豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、有二良田美地桑竹之屬一、阡陌交通、雞犬相聞、…男女衣著、悉如二外人一、黃髮垂髫、怡然自樂云々」

〔王維〕字摩詰。盛唐の詩人。

〔淵明〕名は潛。東晉の詩人。性菊を愛す。

〔フアウスト〕獨逸の大詩人ゲーテの作。

〔ハムレット〕英國の大詩人シェクスピアの作。

〔非人情〕作者の新造語である。俗世間の人情から超越する意で、本篇の本領を示す標語である。人情に反き悖る意の不人情とは異なる。

〔じんじん端折り〕裾から七八寸上にある脊縫の所を摘んで帶に挾むこと。神事端折の意か、一説には、ぢんぢ端折で、ぢんぢは爺の音便であると。

〔レオナルド・ダ・ヰンチ〕(1454—1519)伊太利に生れた藝術家。

〔鐘は一つだが音は云々〕人は同一の事物を同樣に考へる事は出來るが、その事物から同一の感じを得ける事は出來ぬ。事物が感情に觸れる時、其結果は必ず人によつて差違を生じる。

〔浮世小路〕浮世の巷。俗世間。

拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其通り、いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する程非人情が募つては居らん。こんな所でも人間に逢ふ。じん〳〵端折りの頰冠りや、赤い腰卷の姉さんや、時には人間より顏の長い馬に迄逢ふ。百萬本の檜に取り圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。夫れ所か、山を越えて落ちつく先の今宵の宿は那古井の温泉場だ。

唯、物は見樣でどうでもなる。レオナルド、ダ、ヰンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれるとある。一人の男、一人の女も見樣次第で如何樣とも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、其積りで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狹苦しく暮した時とは違ふだらう。よし全く人情を離れる事が出來んでも、責めて御能拜見の時位な淡い心持

〔七騎落〕謠曲の曲目。頼朝が石橋山の戰に敗れて、主從八騎、眞鶴崎から安房に渡海する船中の事を題材にしたもの。

〔墨田川〕謠曲の曲目。洛陽北白河吉田少將惟房卿の子梅若丸が人買の爲に欺かれて東に下る。その母、吾が子の行方を尋ねて隅田川まで來り、我子の死んだことを知り、梅若塚の前に念佛してゐると、梅若丸が髣髴として容をあらはし、言葉をかはすかと思ふと、春の夜は明けて跡を消して終ふといふ趣を仕組んだもの。

〔芭蕉〕松尾桃青。

〔枕元〔云々〕「蚤虱馬の尿する枕もと」(奥細道)山中のむさくろしい家に泊つた時の實況を詠んだもの。

にはなれさうなものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保證が出來ん。然しあれは情三分藝七分で見せるわざだ。我等が能から享ける難有味は下界の人情をよく其儘に寫す手際から出てくるのではない。其儘の上へ藝術といふ着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらく此旅中に起る出來事と、旅中に出逢ふ人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだらう。丸で人情を棄てる譯には行くまいが、根が詩的に出來た旅だから、非人情のやり序でに、可成節儉してそこ迄は漕ぎ付けたいものだ。南山や幽篁とは性(たち)の違つたものに相違ないし、又雲雀や菜の花と一所にする事は出來まいが、成可之に近づき得る限りは同じ觀察點から人間を視てみたい。芭蕉と云ふ男は、枕元へ馬が尿するのをさへ雅な事と見立てて發句にした。余も是から逢ふ人物を……百姓も、町人も、村役場の書記も、

爺さんも婆さんも――悉く大自然の點景として描き出されたものと假定して取こなして見よう。尤も畫中の人物と違つて、彼等はおのがじゝ勝手な眞似をするだらう。然し普通の小説家の様に其勝手な眞似の根本を探ぐつて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構はない。畫中の人間が動くと見れば差し支ない。畫中の人物はどう動いても平面以外に出られるものでない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思へばこそ、此方と衝突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になればなる程美的に見て居る譯に行かなくなる。是から逢ふ人間には超然と遠き上から見物する氣で、人情の電氣が無暗に雙方で起らない様にする。さすれば相手がいくら働いても、こちらの懷には容易に飛び込めない譯だから、つまりは畫の前へ立つて、畫中の人物が畫面の中をあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ譯になる。問

〔葛藤〕どた〳〵。紛爭悶着。

〔立方的に働く云々〕此主人公は超俗的態度で、高い處から俗世間を下瞰してゐる。俗世間の者は地上を離れることが出來ない、畫中の人物が畫面から離れられぬと同様、何れも平面的に走るのみであるから、主人公の居る處とは交渉がない。然るに俗世間の者が、自分と利害關係を持つことを、「立方的に働く」といつたもの。

三尺も隔てゝ居れば落ち付いて見られる。あぶな氣なしに見られる。言を換へて云へば、利害に氣を奪はれないから、全力を擧げて彼等の動作を藝術の方面から觀察する事が出來る。餘念もなく美か美でないかと鑒識する事が出來る。

こゝ迄決心をした時、空があやしくなつて來た。煮え切れない雲が頭の上へ靠垂れ懸つて居たと思つたが、いつのまにか、崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しと〳〵と春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過して、今は山と山との間を行くのだが、雨の糸が濃かで霧を欺く位だから、隔たりはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹き拂ふとき、薄黑い山の脊が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てゝ向ふが脈の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものがちよく〳〵顔を出す。出すかと思ふと、隱れる。雨が動くのか、木が

〔鑒識〕善惡美醜を見わけること。

〔深く罩める雨〕この雨が霧雨である所から、罩めると云うたのだ。

〔夢が動く〕　超俗的な非人情な藝術三昧の心持を、「夢」の一語で表はし、さうした心持で色々と感じる、即ち心持の活動を「動く」といつた。

〔影繪〕　影人形。手や又は物で、人や其他種々の形を影にうつしたもの。

動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外廣くなつて、且つ平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたり〳〵と落つる頃、五六間先きから鈴の音がして、黑い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ、大分濡れたね」

まだ十五丁かと振り向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の樣に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

糠の樣に見えた粒は次第に太く長くなつて、今は一筋毎に風に捲かれる樣迄が目に入る。羽織はとくに濡れ盡して、肌着に浸み込んだ水が身體（からだ）の温度で生暖（なまぬる）く感ぜられる。氣持がわるいから、帽を傾けてすた〳〵歩行く。

〔銀箭〕　雨脚の白く見えるのを銀の箭に見立てゝ言うたもの。

〔われならぬ人〕　「行くわれを」の尻の文句をそのまま取つて、文を圓滑にしてゐる。

〔有體なる己れ〕　現實の自己。

〔純客觀〕　客觀は主觀に對立する概念。客體、外界、又は經驗され、認識れさる對象の意。「純客觀に眼をつくる」は、純客觀の立場で自分を見ること。

〔豎子〕　童子。又は人を賤しめていふ語。

〔雲煙飛動〕　山水畫の見事なのを稱していふ。

〔落花啼鳥〕　自然の意。孟浩然の詩「春眠不覺曉、處々聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少」

〔蕭々〕　ものさびしい貌。「風蕭々兮易水寒」（史記）

〔非人情が云々〕　非人情の情趣を味ふ爲の旅である

茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも詠まれる。有體なる己れを忘れ盡くして純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくして、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲煙飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として獨り春山を行く吾の、いかに美しきかは猶更に解せぬ。初めは帽を傾けて歩行いた。後には唯足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る〳〵歩行いた。雨は滿目の樹梢を搖かして四方より孤客に逼る。非人情がちと强過ぎた樣だ。

が、非人情の情趣が強過ぎたといふので、風雨の苦しみの強過ぎたのを、酒落て言うたもの。

〔屈托氣〕　屈托は、氣に懸けて憂へること。一つの事に思ひ沈むこと。

〔文久錢〕　德川幕府が文久三年に鑄た錢で、もとは一枚四文に相當したが、明治になつてからは、一錢五厘に通用した。

二

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向ふ側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈托氣にふらりふらりと搖れる。下に駄菓子の箱が三つ許り並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれて居た鷄が、驚ろいて眼をさます。ク、、、ク、、と騷ぎ出す。敷居の外の土竈（ごへつつひ）が、今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてる上に、眞黑な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷ですつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。

〔とぐろ〕　渦狀に卷いてゐるさま。

〔二十世紀〕　物質文明の進歩發達した忙しいせち辛い世の中の意。

鷄は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ奥迄馳けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。丸で余を狐か狗の樣に考へてゐるらしい。床几の上には一升桝程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顏で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は呑氣に燻つて居る。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、いつ迄も待つてるのも少し二十世紀とは受け取れない。

〔寶生〕能の流派の一。「寶生の舞臺」は、寶生流の能舞の舞臺。

〔高砂〕高砂・住吉・の松の精があらはれて、松の謂れを述べ、和歌の道を語り、遂に住吉明神が出現して、神人和合し、君を祝ひ國を祝ふ趣向の、祝言能である。老翁をシテ、老女をツレ、阿蘇の神主をワキとする。「箒を擔いだ爺」は、老翁のこと、「婆さん」は「老女」のこと。

〔活人畫〕古今の事蹟又は新案の事柄を、繪畫的に表現する爲に、場所の光景を示し、各人所要の裝をして、其場に出現し、畫中の人物の如く靜止してゐるもの。

〔橋懸〕能の樂屋から舞臺へ通ふ路で、欄干があつて橋のやうに造つたもの。

こゝらが非人情で面白い。其上出て來た婆さんの顏が氣に入つた。

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合うた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顏が殆んど眞むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に其表情はぴしやりと心のカメラへ燒き付いて仕舞うた。茶店の婆さんの顏は此寫眞に血を通はした程似て居る。

「お婆さん、此所を一寸借りたよ」

「はい、是は一向存じませんで」

「大分降つたね」

「生憎な御天氣で、嘸御困りで御座んしよ。おゝ大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ」

〔胡麻ねぢ・微塵棒〕駄菓子の名。

〔袖無し〕ちやん〳〵のこと、兩袖の無い、綿入羽織のやうなもの。田舍の老人や子供が着る。胴肩衣ともいふ。

「そこをもう少し燃し付けてくれゝばあたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しつ〳〵と二聲で鷄を追ひ下げる。こゝゝゝと馳け出した夫婦は、焦茶色の疊から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞を垂れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか刳り抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪無雜作に燒き付けられて居る。

「御菓子を」と今度は鷄の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。糞はどこぞに着いて居らぬかと眺めて見たが、それは箱のなかに取殘されてゐた。

婆さんは袖無しの上から、襷をかけて、竈の前へうづくまる。余

は懷から寫生帖を取り出して、婆さんの横顏を寫しながら、話しをかける。

「閑靜でいゝね」

「へえ、御覽の通りの山里で」

「鶯は鳴くかね」

「えゝ、毎日の樣に鳴きます。此邊は夏も鳴きます」

「聞きたいな、ちつとも聞えないと猶聞きたい」

「生憎今日は——先刻の雨で何處ぞへ逃げました」

折りから、竈のうちが、ぱち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。嘸御寒かろ」と云ふ。軒端を見ると青い煙りが、突き當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんで居る。

「あゝ、好い心持ちだ、御蔭で生き返つた」

〔崩れながらに〕崩れたまま。

〔逡巡〕あとしざりすること。行きて進まぬこと。

〔春の空の一思ひに晴れず、ぐづついてゐる〕をいふ。

〔もどかし〕物事が捗取らないで、いら立たしいこと。ぢれつたい。

〔巉岸〕サングワン。鋭く尖つた山。

〔蘆雪〕長澤蘆雪。應擧の弟子。

〔山姥〕山に居るといふ女性の怪物。蘆雪の山姥の圖は、山姥が破傘を背負ひ、右手に果實の入つた籠をかけ、左手で金太郎の手をとりつゝ、後を向いてゐる姿である。

〔紅葉のなか〕謠曲に、平維茂が、信州戸隱山で、紅葉狩の折り、その山の鬼女を退治したといふ傳說に基いて作つた、紅葉狩といふがある。

〔別會能〕臨時の能の會。

〔金屏〕金屏風の略。芭蕉「金屏の松のふるびや冬

「いゝ具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り拔けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡して、老嫗の指さす方に巉岸と、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。

余はまづ天狗岩を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に兩方を見比べた。畫家として余が頭のなかに存在する婆さんの顏は高砂の婆と、蘆雪のかいた山姥のみである。蘆雪の圖を見たとき、理想の婆さんは物凄いものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考へた。寶生の別會能を觀るに及んで、成程老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚ろいた。あの面は定めて名人の刻んだものだらう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もかうあらはせば、豊かに、穩やかに、あたゝかに見える。金

籠り」

〔苧もうみます〕苧をうみつむぐこと。

屏にも、春風にも、あるは櫻にもあしらつて差支ない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して向ふを指してゐる袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が寫生帖を取り上げて、今暫くといふ途端に婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に寫生帖を、火にあてゝ乾かしながら、

「御婆さん、丈夫さうだね」と訊ねた。

「はい。有難い事に達者で——針も持ちます、苧もうみます、御團子の粉も磨きます」

此御婆さんに石臼を挽かして見たくなつた。然しそんな注文も出來ぬから、

「こゝから那古井迄は一里足らずだつたね」と別な事を聞いて見る。

「はい二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

「込み合はなければ、少し逗留しようかと思ふが、まあ氣が向けばさ」

〔頓と〕全く。ひたすら。

「いえ、戰爭が始まりましてから、頓と參るものは御座いません。丸で締め切り同樣で御座います」

「妙な事だね。それぢや泊めて呉れないかも知れんね」

「いえ、御賴みになればいつでも宿めます」

「宿屋はたつた一軒だつたね」

「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のものもちで、湯治場だか　隱居所だかわかりません」

「ぢや御客がなくても平氣な譯だ」

「旦那は始てで」

「いや、久しい以前一寸行つた事がある」

會話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鷄を靜かに寫生して居ると、落ち付いた耳の底へぢやらん〳〵と云ふ馬の鈴が聽え出

〔惟然〕美濃國郡の人。或日庭前の梅花が鳥の羽風に散るに感じ、隱遁の志起り、妻子を捨て、薙髮して蕉門の吟徒となつた。常に旅から旅へ漂泊の月日を送り、芭蕉翁遷化後は、風羅念佛といふものを作り、諷ひ風狂して、足のゆく處に走り、足の留る處に留り、心のまゝに身の天然を終つた。惟然坊句集一卷がある。作者は、非人情の旅に在る自分から惟然に聯想して此句を作つたものであらう。

〔空山一路〕空山は靜かなる山。王維「空山不レ見レ人、但聞二人語響一」

〔馬子唄の云々〕子規「馬子歌の鈴鹿上るや春の雨」

した。此聲がおのづと拍子をとつて頭の中に一種の調子が出來る。眠りながら、夢に隣りの臼の音に誘はれる樣な心持ちである。余は鷄の寫生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六匹逢つた。逢つた五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らして居る。今の世の馬とは思はれない。

やがて長閑な馬子唄が、春に更けた空山一路の夢を破る。憐れの底に氣樂な響がこもつて、どう考へても畫にかいた聲だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と今度は斜に書き付けたが、書いて見て、是は自分の句でないと氣が付いた。

「又誰ぞ來ました」と婆さんが半ば獨り言の樣に云ふ。

〔古今の春を貫いて〕古から今日まで、毎春々々「貫く」に、縱に古今の春を貫通する意と、道の長く村落を貫いてゐる意との兩意を兼ねてゐる。

〔花を厭へば云々〕滿山滿地花に埋まる小村の形容。

〔幾代の節〕昔から今日まで、長い間聞いた、幾多の馬子唄節の意であらう。

只一條の春の路だから、行くも歸るも皆近付きと見える。最前逢うた五六匹のぢやらん〳〵も悉く此婆さんの腹の中で又誰ぞ來たと思はれては山を下り、思はれては山を登つたのだらう。路寂寞と古今の春を貫いて、花を厭へば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からぢやらん〳〵を數へ盡くして、今日の白頭に至つたのだらう。

馬子唄や白髮も染めで暮るゝ春

と次のページへ認めたが、是では自分の感じが云ひ終せない、もう少し工夫のありさうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考へた。何でも白髮といふ字を入れて、幾代の節と云ふ句を入れて、馬子唄といふ題も入れて、春の季も加へて、それを十七字に纏めたいと工夫して居るうちに、

「はい、今日は」と實物の馬子が店先に留つて大きな聲をかける。

〔城下〕 大名の居城のある市街。

〔今日には云々〕 今日の衣食には不自由しない意。

「おや源さんか。又城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ」

「さうさ、鍛冶町を通つたら、娘に靈岩寺の御札を一枚もらつてきて御呉れなさい」

「はい、貰つてきよ。一枚か。――お秋さんは善い所へ片付いて仕合せだ。な、御叔母さん」

「難有い事に今日には困りません。まあ仕合せと云ふのだらうか」

「仕合せとも、御前。あの那古井の嬢さまと比べて御覽」

「本當に御氣の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合がいゝかい」

「なあに相變らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。

「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫でる。

〔深い空〕 薄墨色の雲に蔽はれた空を、感じの上で「深い」と言うたもの。

〔足をすくはれ〕 足を拂ひ去られること。髮は露の宿る葉や花の、風に吹かれて、搖れるのをいふ。

〔冥想〕 心に深く考へる。深思。

〔振袖〕 袖が長くて脇の下を縫はないもの。

〔高島田〕 島田のまげの根を高く結うたもの。島田まげは、女の髮の結ひ方の一種。女歌舞伎の名人、島田萬吉の結ひ初めたものだとも、駿河國島田驛の遊女の結ひ初めたものだともいふ。

枝繁き山櫻の葉も花も、深い空から落ちた儘なる雨の塊まりをつぽりと宿して居たが、此時わたる風に足をすくはれて、居たゝまらずに、假りの住居を、さら〳〵と轉げ落ちる。馬は驚ろいて長い鬣を上下に振る。

「コーラッ」と叱り付ける源さんの聲が、ぢやらん、ぢやらんと共に余の冥想を破る。

御婆さんが云ふ。「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、まだ眼の前に散らついて居る。裾模樣の振袖に、高島田で、馬に乘つて……」

「さうさ、船でなかつた。馬であつた。矢張り此處で休んで行つたな、御叔母さん」

「あい、其櫻の下で嬢樣の馬がとまつたとき、櫻の花がほろ〳〵と落ちて、折角の島田に斑が出來ました」

〔花の頃を云々〕 作者より虚子宛の端書に「拜啓昨日の駄句、花嫁の馬で越ゆるや山櫻、を花の頃を越えてかしこし馬に嫁と致し候が御賛成下さい云々」（明治三十九年八月十一日附）といふがある。

〔ミレー〕 John Everett Millais（1829—96）英國の畫家。

〔オフェリヤ〕 Opbelia シエクスピアの劇「ハムレツト」の中の人物。戀と道との板挾みになつて狂死する可憐の少女。

〔心の道具立〕 想像力によつて腦裏に結ばれた心像。

〔棕梠箒〕 棕梠の毛で作つた箒。

〔慧星の〕 慧星の如く。高島田の花嫁の顔を想像してゐる處へオフェリアの顔が飛出した、その不調和な突飛さを、慧星の出現に比したのであらう。

余は又寫生帳をあける。此景色は畫にもなる、詩にもなる。心のうちに花嫁の姿を浮べて、當時の様を想像して見て、したり顔に、

花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書き付ける。不思議な事には衣裝も髪も馬も櫻もはつきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思ひつけなかつた。しばらくあの顔か此顔かと思案して居るうちに、ミレーのかいた、オフェリヤの面影が忽然と出て來て高島田の下へすぽりとはまつた。是は駄目だと、折角の圖面を早速取り崩す。衣裝も髪も馬も櫻も一瞬間に心の道具立から奇麗に立ち退いたが、オフェリヤの合掌して水の上を流れて行く姿丈は、朦朧と胸の底に殘つて、棕梠箒で煙を拂ふ様にさつぱりしなかつた。空に尾を曳く彗星の何となく妙な氣になる。

「それぢや、まあ御免」と源さんが挨拶する。

「歸りに又御寄り。生憎の降りで七曲りは難儀だろ」

〔羈絏〕 キセツ。羈は馬のきづな。絏はたづな。爰は「たづな」と訓む。

〔轉輪〕 うつりめぐること。

〔仙〕 こゝは凡俗を超越した人の意。杜甫「自稱臣是酒中仙」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行き出す。源さんの馬も歩行き出す。ぢやらん〳〵。

「あれは那古井の男かい」

「さう、那古井の源兵衛で御座んす」

「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乘せて、峠を越したのかい」

「志保田の嬢様が城下へ御輿入のときに、嬢様を青馬に乘せて、源兵衛が羈絏を牽いて通りました。——月日の立つのは早いもので、もう今年で五年になります」

鏡に對ふときのみわが頭の白きを喞つものは幸の部に屬する人である。指を折つて始めて、五年の流光に轉輪の疾き趣を解し得たる婆さんは、人間としては寧ろ仙に近づける方だらう。余は斯う答へた。

「嘸美しかつたらう。見にくればよかつた」

「ハ、、今でも御覽になれます。湯治場へ御越しなされば、屹度出

て御挨拶をなされませう」

「はあ、今では里に居るのかい。矢張り裾模様の振袖を着て、高島田に結つて居ればいゝが」

「たのんで御覽なされ。着て見せましよ」

余はまさかと思つたが、婆さんの樣子は存外眞面目である。非人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云ふ。

「嬢樣と長良の乙女とはよく似て居ります」

「顏がかい」

「いゝえ。身の成り行きがで御座んす」

「へえ、其長良の乙女と云ふのは何者かい」

「昔し此村に長良の乙女と云ふ、美しい長者の娘が御座りましたさうな」

「へえ」

〔長良の乙女〕　二人以上の男性に戀されて、思案にあまり、あたら我身を河海に投じ、或は樹枝に懸けて死んだ少女の傳說は、遠い昔からある。萬葉集の眞間手兒名・菟原處女・櫻兒・蠶兒などがそれである。この菟原處女の傳說は、大和物語には生田川傳說となつて、一層複雜化されてゐる。

「所が其娘に二人の男が一度に懸想して、あなた」

「なる程」

「さゝだ男に靡かうか、さゝべ男に靡かうかと、娘はあけくれ思ひ煩つたが、どちらへも靡きかねて、とう〳〵、

あきづけばをばなが上に置く露の
けぬべくもわはおもほゆるかも

と云ふ歌を詠んで、淵川へ身を投げて果てました」

余はこんな山里へ來て、こんな婆さんから、こんな古雅な言葉でこんな古雅な話をきかうとは思ひがけなかつた。

「是から五丁東へ下ると、道端に五輪塔が御座んす。序に長良の乙女の墓を見て御行きなされ」

余は心のうちに是非見て行かうと決心した。婆さんはそのあとを語りつゞける。

〔さゝだ男〕　萬葉集卷九、過ニ葦屋處女墓一時作歌一首幷短歌とある中の、「古の小竹田丁子の妻どひし菟原處女の奥城ぞこれ」とある歌からとつたもの。「さゝべ」は「さゝだ」と對にするために、その語尾をかへたものであらう。

〔あきづけば云々〕　此歌は、萬葉集卷八に出てゐる日置長枝娘子の歌で、本三句は「けぬべく」、消えて終ひさう）の序。「あきづく」は、秋になること。

〔五輪塔〕　五輪塔婆のこと。地水火風空の五大に象つた、如意珠形・半月形・三角形・圓形・方形の五箇の石を積み重ねた塔婆。

「那古井の嬢様にも二人の男が祟りました。一人は嬢様が京都へ修業に御出での頃御逢ひなさつたので、一人はこゝの城下で隨一の物持ちで御座んす」

「はあ、御嬢さんはどつちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由(わけ)もありましたろが、親ご様が無理にこちらへ取り極めて……」

「目出度、淵川へ身を投げんでも濟んだ譯だね」

「所が――先方でも器量望みで貰ひなさつたのだから、隨分大事にはなすつたかも知れませぬが、もと〳〵強ひられて御出なさつたのだから、どうも折合がわるくて、御親類でも大分御心配の樣子で御坐んした。所へ今度の戰爭で旦那樣の勸めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢樣は又那古井の方へ御歸りになります。世間では嬢樣の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々內

〔淵川〕〔云々〕　生田川傳說の少女は、「住み侘びぬ吾が身投げてむ津の國の生田の川は名のみなりけり」と詠んで、川に身を投じた。

氣の優しいかたが、此頃では大分氣が荒くなつて、何だか心配だと源兵衛が來るたびに申します。……」

是からさきを聞くと、折角の趣向が壞れる。漸く仙人になりかけた所を、誰か來て羽衣を歸せ〳〵と催促する樣な氣がする。七曲りの險を冒して、やつとの思ひで、こゝ迄來たものを、さう無暗に俗界に引きづり下されては、飄然と家を出た甲斐がない。世間話しもある程度以上に立ち入ると浮世の臭ひが毛孔から染込んで、垢で身體(からだ)が重くなる。

「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十錢銀貨を一枚床几の上へかちりと投げ出して立ち上がる。

「長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁程の近道になります。路はわるいが、御若い方には其方がよろしかろ――是は多分に御茶代を――氣を付けて御越しなされ」

〔羽衣〕　天人の着る衣。「羽衣を歸せ」は、俗界に引き戻す意。那古井の御嬢さんの話は、現實感が强過ぎる、非人情の旅にはふさはしくない。

〔垢〕　心をけがす煩惱を塵垢といふ。世俗の紛々たる出來事を聞いて、超俗の清々しい心の汚れるのを「垢で身體が重くなる」と洒落たのである。

〔廻廊〕神社佛閣の周圍に長く折り廻して造つた廊下。

〔紙燭〕古、室内で火を燈すに用ゐたもの、細い松の木の長さ一尺五寸程のものゝ先の方を燒いて黑くし、それに油を引いて炙り乾し、下の方を紙屋紙で卷いてある。又は、紙撚を油に浸したもの。

三

昨夕は妙な氣持がした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合、庭の作り方は無論、東西の區別さへわからなかつた。何だか廻廊の樣な所をしきりに引き廻されて、仕舞に六疊程の小さな座敷へ入れられた。昔來た時とは、丸で見當が違ふ。晩餐を濟して、湯に入つて、室へ歸つて茶を飲んで居ると、小女が來て、床を延べよかと云ふ。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の取次も、晩食の給仕も、湯壺への案内も、床を敷く面倒も、悉く此小女一人で辨じて居る。それで口は滅多にきかぬ。と云うて、田舍染みても居らぬ。赤い帶を色氣なく結んで、古風な紙燭をつけて、廊下の樣な梯子段の樣な所をぐる〳〵廻らされた時、同じ帶の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段

〔カンヴスの中云々〕畫中の人物の意。

ともつかぬ所を、何度も降りて湯壺へ連れて行かれた時は、既に自分ながら、カンヴスの中を往來して居る樣な氣がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしてないから、普段使つて居る部屋で我慢してくれと云つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと、人間らしい言葉を述べて、出て行つたが、其足音が例の曲りくねつた廊下を、次第に下の方へ遠ざかつた時に、あとがひつそりとして、人の氣がしないのが氣になつた。

生れてから、こんな經驗はたゞ一度しかない。昔し房州を舘山から向ふへ突き拔けて、上總から銚子迄濱傳ひに歩行た事がある。其時ある晩、ある所へ宿つた。ある所と云ふより外に言ひ樣がない。今では土地の名も宿の名も、丸で忘れて仕舞つた。第一宿屋へとまつたかゞ問題である。棟の高い大きな家に女がたつた二人居た。余がよめるかと聞いたとき、年をとつた方がはいと云つて、若い方が

〔修竹〕シウチク。長く延びた竹。

〔婆娑つゝ〕ばさ〳〵と亂れ動く。

〔あらばこそ〕「あらばこそあれ」の略。あるならばよいがといふ、裏面にありはしないといふ意を含んでゐる。

〔まとも〕眞正面。

〔草雙紙〕德川時代の繪入本の一。假名本・赤本・黑本・黃表紙・合卷物などの種類がある。その中、合卷物には、敵討の物語に怪談を絡ませたものが澤山ある。

此方へと案内をするから、ついて行くと、荒れ果てた廣い間をいくつも通り越して一番奥の、中二階へ案内をした。三段登つて廊下から部屋へ這入らうとすると、板庇の下に傾きかけて居た一叢の修竹が、そよりと夕風を受けて、余の肩から頭を撫でたので、既にひやりとした。緣板は既に朽ちかゝつて居る。來年は筍が緣を突き拔いて座敷のなかは竹だらけにならうと云つたら、若い女が何にも云はずにに〳〵と笑つて、出て行つた。

其晩は例の竹が、枕元で婆娑ついて、寢られない。障子をあけたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明かなるに、眼を走らせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に續いてゐる。草山の向ふはすぐ大海原でどゞん〳〵と大きな濤が人の世を威嚇しに來る。余はとう〳〵夜の明ける迄一睡もせずに、怪し氣な蚊帳のうちに辛棒しながら、丸で草雙紙にでもありさうな事だと考へた。

〔竹影云々〕榮根譚「古德云、竹影掃堦塵不動、月輪穿沼水無痕、吾儒云、水流任意境常靜、花落雖頻意自閒、人常持此意、以應事接物、身心何等自在」

〔大徹〕曹洞宗の僧、宗令のこと。然し本書の奥に觀海寺の現在の住職の名に用ゐてあるのは、勿論假設である。

〔黃檗〕支那黃檗山の隱元が清の亂を避けて來朝し、宇治大和田に一宇を建て、規模を支那の黃檗山にとり、黃檗山萬福寺と號した。黃檗宗は臨濟宗より分れた一派。

〔高泉和尙〕名は性敦、黃檗山第五世、當山中興の祖。

〔即非〕名は如一。小倉に福聚寺を開いた人。

〔木庵〕名は性瑫、黃檗山第二世。

〔蒼勁〕蒼古遒勁。澁味があつて强い。

其後旅も色々したがこんな氣持になつた事は、今夜この那古井へ宿る迄はかつて無かつた。

仰向に寢ながら、偶然眼を開けて見ると欄間に、朱塗りの緣をとつた額がかかつてゐる。文字は寐ながらも竹影掃堦塵不動と明らかに讀まれる。大徹といふ落款も慥かに見える。余は書に於ては皆無鑑識のない男だが、平生から、黃檗の高泉和尙の筆致を愛して居る。隱元も即非も木庵も夫々に面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁でしかも雅馴である。今此七字を見ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉としか思はれない。しかし現に大徹とあるからには別人だらう。こゝによると、黃檗に大徹といふ坊主が居たかも知れぬ。それにしては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかゝつてゐる若冲の鶴の圖が目につく。是は商賣

〔雅馴〕　上品で生硬でないこと。
〔若沖〕　伊藤汝鈞。德川時代の畫家。最初狩野派を學び、ついで元・明の畫風に專心し、後、光琳の賦彩を修め、殊に花鳥に秀でてゐた。
〔逸品〕　すぐれた品。
〔精緻〕　極めてめんみつなこと。
〔飄逸〕　氣高く俗離れのしてゐること。

〔柳の枝へ云々〕　ハムレツト劇のオフエリヤは、柳の枝に持つてゐる花蔓を掛けようとして攀ぢ上り枝もろ共水に墜ち、幾くさりの歌を唄ひつゝ沈んでいつた。

柄丈に、部屋に這入つた時、既に逸品と認めた。若沖の圖は大抵精緻な彩色ものが多いが、此鶴は世間に氣兼なしの一筆がきで、一本足ですらりと立つた上に、卵形の胴がふわつと乘かつてゐる樣子は、甚だ吾意を得て、飄逸の趣は、長い嘴のさき迄籠つてゐる。床の隣りは違ひ棚を略して、普通の戸棚につゞく。戸棚の中には何があるか分らない。

すや〳〵と寢入る。夢に。

長良の乙女が振袖を着て、青馬に乘つて、峠を越すと、いきなり、さゝだ男と、さゝべ男が飛び出して兩方から引つ張る。女が急にオフエリヤになつて、柳の枝へ上つて、河の中を流れながら、うつくしい聲で歌をうたふ。救つてやらうと思つて、長い竿を持つて、向島を追懸けて行く。女は苦しい樣子もなく、笑ひながら、うたひながら、行末も知らず流れを下る。余は竿をかついで、おゝいおゝいと呼ぶ。

〔雅俗混淆な夢〕　長良の乙女とオフエリヤとは古雅である。救つてやらうと竿を持つて向島を追懸けてゆくのは現代的の俗である。
〔大慧禪師〕　臨濟宗の高僧。

〔影をひたし〕　障子に影をうつしてゐるのを、森沈たる春の夜、冴えた月光の漲つてゐる障子の面を清らかな水面に比して、かく言うたもの。
〔一縷の脈〕　ひとすぢの脈。靜寂な春の夜に微かに傳はる歌の聲を、人體の血脈に比したもの。

そこで眼が醒めた。腋の下から汗が出てゐる。妙に雅俗混淆な夢を見たものだと思つた。昔し宋の大慧禪師と云ふ人は、悟道の後、何事も意の如くに出來ん事はないが、只夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたさうだが、成程尤もだ。文藝を生命にするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅が利かない。こんな夢で大部分畫にも詩にもならんと思ひながら、寢返りを打つと、いつの間にか障子に月がさして、木の枝が二三本斜めに影をひたしてゐる。冴える程の春の夜だ。

氣の所爲か、誰か小聲で歌をうたつてる樣な氣がする。夢のなかの歌が、此世へ拔け出したのか、或は此世の聲が遠き夢の國へ、うつゝながらに紛れ込んだのかと耳を峙てる。慥かに誰かうたつてゐる。細く且つ低い聲には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷の脈をかすかに搏たせつゝある。不思議な事に、其調子はとにかく、

〔秒を縮め分を割いて〕一秒々々心を縮め、一分々々心を割くの意。
〔心細さの云々〕心細い感じがいよ〳〵心細くなる。「細い」といふ語を疊んで、疊語法と漸層法とを併用し、次第に心細さの加つて行く、神經の微妙な働きを、巧みに簡明に表してゐる。
〔春の恨み〕纖麗な綿々嫋々として絶えぬ春の哀愁。

文句をきくと――枕元でやつてるのでないから、文句のわかりやうはない。――其聞えぬ筈のものが、よく聞える。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良の乙女の歌を、繰り返し繰返す樣に思はれる。

初めのうちは緣に近く聞えた聲が、次第々々に細く遠退いて行く。突然と已むものには、突然の感はあるが、憐れはうすい。ふツつりと思ひ切つたる聲をきく人の心には矢張りふツつりと思ひ切つたる感じが起る。是と云ふ句切りもなく自然に細つて、いつの間にか消えるべき現象には、われも亦秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫の如く、消えんとしては、消えんとする燈の如く、今已むかとのみ心を亂す此歌の奥には、天下の春の恨みを悉く萃めたる調べがある。

今迄は床の中に我慢して聞いて居たが、聞く聲の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さるゝと知りつゝも、其聲を追ひかけたくなる。細くなればなる程、耳丈になつても、あとを慕つて飛んで行きたい氣がする。もうどう焦慮(あせ)つても鼓膜に應へはあるまいと思ふ一刹那の前、余は堪らなくなつて、われ知らず蒲團をすり拔けると共に、さらりと障子を開けた。途端に自分の膝から下が斜に月の光を浴びる。寐卷の上にも木の影が搖れながら落ちた。

障子をあけた時にはそんな事には氣が付かなかつた。あの聲はと、耳の走る見當を見破ると――向ふに居た。花ならば海棠かと思はる る幹を脊に、よそ〳〵しくも月の光りを忍んで、朦朧たる影法師が居た。あれかと思ふ意識さへ、確とは心にうつらぬ間に、黑いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わが居る部屋つゞきの棟の角がすらりと動く、脊の高い女姿を、すぐに遮つて仕舞ふ。

借着の浴衣一枚で、障子へつらまつた儘、しばらく茫然として居

〔影法師〕うつしゑ（火光で障子などに映した繪）のこと、又は、日光や燈火の光で人影の地上や障子に映つたもの。

たが、やがて我に歸ると、山里の春は中々寒いものと悟つた。ともかくもと拔け出でた蒲團の穴に、再び歸參して考へ出した。括り枕のしたから、袂時計を出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考へ出した。よもや化物ではあるまい。化物でなければ人間で、人間とすれば女だ。あるひは此家の御嬢さんかも知れない。然し出歸りの御嬢さんとしては、夜なかに山つゞきの庭へ出るのがちと不穩當だ。何にしても中々寢られない。枕の下にある時計迄がちく〳〵口をきく。今迄懷中時計の音の氣になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考へろさあ考へろと催促する如く、寢るな寢るなと忠告する如く、口をきく。怪しからん。

怖いものも只怖いもの其儘の姿と見れば詩になる。凄い事も、己れを離れて、只單獨に凄いのだと思へば畫になる。失戀が藝術の題目となるのも全くその通りである。失戀の苦しみを忘れて、其やさし

〔口をきく〕　擬人法。

〔輪廓〕　周圍の線。

〔烏有〕　焉んぞ此事有らんの義で、無の意に用ゐる。「烏有の山水」は非實在の自然。

〔壺中の天地〕　別天地。漢書「費長房者、汝南人也、曾爲市掾、市中有老翁、賣藥、懸一壺於肆頭、及市罷、輒跳入壺中、市人莫之見、唯長房於樓上覩之、異焉、因往再拜、翁乃與俱入壺中、唯見玉堂嚴麗、旨酒甘肴盈衍其中、共飲畢而出」

〔曾遊〕　昔遊。

〔喋々〕　テフ々々。どよみなくしやべる貌。

〔したり顏〕　得意顏。

い所やら、同情の宿る所やら、憂のこもる所やら、一歩進めて云へば失戀の苦しみ其物の溢るゝ所やらを、單に客觀的に眼前に思ひ浮べるから文學美術の材料になる。世には有りもせぬ失戀を製造して自ら强ひて煩悶して、愉快を貪ぼるものがある。常人は之を評して愚だと云ふ、氣違だと云ふ。然し自から不幸の輪廓を描いて好んで其中に起臥するのは、自から烏有の山水を刻畫して、壺中の天地に歡喜すると、その藝術的の立脚地を得たる點に於て全く等しいと云はねばならぬ。この點に於て世上幾多の藝術家は（日常の人としてはいざ知らず）藝術家として常人よりも愚である。氣違である。われ〳〵は草鞋旅行をする間、朝から晩迄苦しいと不平を鳴らしつゞけて居るが、人に向つて曾遊を說く時分には、不平らしい樣子は少しも見せぬ。面白かつた事、愉快であつた事は無論、昔の不平をさへ得意に喋々して、したり顏である。これは敢て自ら欺くの、人を僞

〔琳琅〕 リンラウ。美しい玉。
〔寶璐〕 ハウロ。美しい玉。楚辭「被明月兮佩寶璐」
〔炳乎〕 ヘイコ。明かな貌。
〔現象世界〕 經驗の世界。感知の世界。
〔一翳眼に在つて〕 眼のかすむこと。俗念の爲に心眼の曇るをいふ。翳は眼のほし。
〔空花亂墜〕 空華の眼の前に亂れちらつくをいふ。空花は霞んだ眼で見ると空中に花のやうなものゝちらつくをいふ。煩惱の爲に種々の妄相の見えるに喩へる。
〔俗累の羈縛〕 世の中のわづらひといふ束縛。
〔ターナー〕 Jaseph Mallord Turner (1775－1851) 英國の風景畫家。
〔應擧〕 姓は圓山。德川時代の傑出した畫家。寫生を主とする圓山派の祖。

るのと云ふ丁見ではない。旅行をする間は常人の心持ちで、曾遊を語るときは、既に詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起る。して見ると四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して、三角のうちに住むものを藝術家と呼んでもよからう。

この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の辟易して近づき難しとなす所に於て藝術家は無數の琳琅を見、無上の寶璐を知る。俗に之を名づけて美化と云ふ。其實は美化でも何でもない。燦爛たる彩光は、炳乎として昔から現象世界に實在して居る。只一翳眼に在つて空花亂墜するが故に、俗累の羈縛牢として絶ち難きが故に、榮辱得喪のわれに逼る事念々切なるが故に、ターナーが汽車を寫す迄は汽車の美を解せず、應擧が幽靈を描く迄は幽靈の美を知らずに打ち過ぎるのである。

余が今見た影法師も、只それ限りの現象とすれば、誰れが見ても誰れに聞しても、饒に詩趣を帶びて居る。――孤村の温泉、――春宵の花影、――月前の低誦、――朧夜の姿――どれも是も藝術家の好題目である。此題目が眼前にありながら、余は入らざる詮義立てをして、餘計な探りを投げ込んで居る。折角の雅境に理窟の筋が立つて、願つてもない風流を、氣味の惡るさが踏み付けにして仕舞つた。こんな事なら、非人情も標榜する價値がない。もう少し修行をしなければ、詩人とも畫家とも、人に向つて吹聽する資格はつかぬ。昔伊太利の畫家サルヴトル、ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危險を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と畫帖を懷にして家を出でたからには、余にも其位の覺悟がなくては恥しい事だ。

〔サルヴトル、ロザ〕 Salvator Rasa(1615－73) 伊太利の畫家。
〔有體に落ち付いて〕 有の儘に落着く。私意私情の無い心になる。第三者の立場になるをいふ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に歸れるかと云へば、おのれの感じ其物を、おのが前に据ゑつけて、其感じから一歩退いて、有體に落ち付いて、他人らしく之を檢査する餘地さへ作ればいゝので

〔一種の悟り云々〕俗界を超越し、非人情の立場になる意。

ある。詩人は自分の死骸を、自分で解剖して、其病狀を天下に發表する義務を有して居る。其方便は色々あるが、一番手近なのは、何でも蚊でも手當り次第十七字にまとめて見るのが一番いゝ。十七字は詩形として尤も輕便であるから、顏を洗ふ時にも、厠に上つた時にも、電車に乘つた時にも、容易に出來る。十七字が容易に出來ると云ふ意味は、安直に詩人になれると云ふ意味であつて、詩人になると云ふのは一種の悟りであるから、輕便だと云つて侮蔑する必要はない。輕便であればある程功德になるから、却つて尊重すべきものと思ふ。まあ一寸腹が立つと假定する。腹が立つた所をすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちが既に他人に變じて居る。腹を立つたり、俳句を作つたり、さう一人が同時に働けるものではない。一寸涙をこぼす。此涙を十七字にする。するや否やうれしくなる。涙を十七字に纏めた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出來る男だと云ふ嬉しさ丈の自分になる。

是が平生から余の主張である。今夜も一つ此主張を實行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々と句に仕立てる。出來たら書きつけないと散漫になつて行かぬと、念入りの修業だから、例の寫生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と眞先に書き付けて讀んで見ると、別に面白くもないが、さりとて氣味のわるい事もない。次に「花の影女の影の朧かな」とやつたが、是は季が重つて居る。然し何でも構はない。氣が落ち付いて呑氣になればいゝ。夫から「正一位女に化けて朧月」と作つたが、狂句めいて、自分ながら可笑しくなつた。

此調子なら大丈夫と乘氣になつて出る丈の句をみなかき付ける。

春の星を落して夜半のかざしかな

〔物狂ひ〕きちがひのこと。和名抄「癲狂、訓、太布流、俗云、毛乃久流比」

〔季が重つて〕花も朧も共に春の季で、俳句では一句の中に季の二つあるのを嫌ふのである。

〔正一位〕正一位稻荷大明神のこと、轉じて稻荷樣の御使ひである狐の意。狐が女に化けるといふは、ありふれた世俗の物語から詠んだもの。老女のことを「たうめ」と云ひ、又狐のことを「たうめ」といふのも、狐と女との關係を暗示してゐる。

〔かざし〕挿頭華で、古、頭髮又は冠に挿した花や造花。

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪
春や今宵歌つかまつる御姿
海棠の精が出てくる月夜かな
うた折々月下の春ををちこちす
思ひ切つて更け行く春の獨りかな

〔恍惚〕クワウコツ。うつとりとした貌。
〔幻境〕まぼろしの境地。
〔起臥の二界を云々〕醒睡二境の交錯してゐる甘美な陶碎の心境を具體的に叙述したもので、「詩歌の彩管」は、美しい繪筆の意。「詩歌」は美しいことの喩に用ゐたので、喚喩法の詞姿である。「詩歌の彩管云々」とは、恍惚陶醉の裏に甘美な味のあるをいふ。
〔妖腕〕あやしい腕。

抔と、試みて居るうち、いつしかうと〳〵眠くなる。

恍惚と云ふのが、こんな場合に用ゐるべき形容詞かと思ふ。熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覺の際には誰あつて外界を忘るるものはなからう。只兩域の間に縷の如き幻境が横はる。醒めたりと云ふには餘り朧にて、眠ると評せんには少しく生氣を剩す。起臥の二界を同瓶裏に盛りて、詩歌の彩管を以て、ひたすらに攪き雜せたるが如き狀態を云ふのである。自然の色を夢の手前迄ぼかして、有の儘の宇宙を一段、霞の國へ押し流す。睡魔の妖腕をかりて、あ

〔實相〕萬有の有りの儘の姿。
〔もぎどう〕あら〳〵しく。むどく。爰は、可哀相にといふ意。
〔氤氳〕インウン。氣の盛んなる貌。杜甫「佳氣日氤氳」
〔瞑氣〕メイフン。眼に見えぬ氣。
〔依々〕思ひ慕ふ貌。離れるに忍びない貌。楚辭「志戀々兮依々」
〔寤寐〕ゴビ。めさむるといぬると。

りとある實相の角度を滑かにすると共に、かく和らげられたる乾坤に、われからと微かに鈍き脈を通はせる。地を這ふ烟の飛ばんとして飛び得ざる如く、わが魂の、わが殼を離れんとして離るゝに忍びざる態である。拔け出でんとして逡巡ひ、逡巡ひては拔け出でんとし、果ては魂と云ふ個體を、もぎどうに保ちかねて、氤氳たる瞑氣が散るともなしに四肢五體に纏綿して、依々たり戀々たる心持ちである。

余が寤寐の境にかく逍遙して居ると、入口の唐紙がすうと開いた。あいた所へまぼろしの如く女の影がふうと現れた。余は驚きもせぬ、恐れもせぬ。只心地よく眺めて居る。眺めると云うては些と言葉が强過ぎる。余が閉ぢて居る瞼の裏に、幻影の女が斷りもなく滑り込んで來たのである。まぼろしはそろり〳〵と部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、疊の上には人らしい音も立たぬ。閉

〔襟足〕 襟の邊の髪の生え際。

〔人の死して云々〕 衆生は現世に爲した業によつて、來世には畜生道に生れるといふ輪廻の思想から、熟睡前のうつとりした心持を、人の死後、四十九日の間、所謂中間的存在でゐる、その間の心持にあてはめて想像したもの。

〔十萬億土〕 娑婆世界と極樂世界との間に在る佛土の數。即ち西方十萬億の佛土を過ぎて極樂があるといふ。轉じて極樂の意にも用ゐる。

〔三途の川〕 人が死んで初七日秦廣王の廳に至る途次にある川で、緩急の三瀬があり、生前の造業によつて渡るに三途の別があるから、三途の川といふ。

づる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪の濃い、襟足の長い女である。近頃はやる、ぼかした寫眞を灯影にすかす樣な氣がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべつて暗闇のなかにほのめいた。戸棚が又しまる。疊の波がおのづから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりでに閉たる。余が眠りは次第に濃やかになる。人の死して、まだ牛にも馬にも生れ變らない途中はこんなであらう。

いつ迄人と馬の相中に寐てゐたかわれは知らぬ。耳元にきゝつと女の笑ひ聲がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落されて、天下は隅から隅迄明るい。うらゝかな春日が丸窓の竹格子を黑く染め拔いた樣子を見ると、世の中に不思議と云ふものゝ潜む餘地はなささうだ。神秘は十萬億土へ歸つて、三途の川の向側へ渡つたのだらう。

〔出合頭〕 雙方から行き合ふはずみ。

浴衣の儘、風呂場へ下りて、五分ばかり偶然と湯壺のなかで顏を浮かして居た。洗ふ氣にも、出る氣にもならない。第一昨夕はどうしてあんな心持ちになつたのだらう。晝と夜を界に、かう天地がでんぐり返るのは妙だ。

身體を拭くさへ退儀だから、いゝ加減にして、濡れた儘上つて、風呂場の戸を内から開けると、又驚かされた。

「お早う。昨夕はよく寢られましたか」

戸を開けるのと、此言葉とは殆んど同時にきた。人の居るさへ豫期して居らぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る遑さへないうちに、

「さあ、御召しなさい。」

後ろへ廻つて、ふわりと余の背中へ柔かい着物をかけた。漸くの事

〔途端〕はずみ。折り。ひやうし。
〔佳人〕美人。李延年「北方有佳人、絶世而獨立」
〔品評〕品さだめ。品隲。
〔大藏經〕一切經。佛典の總名。
〔辟易〕開き退いて舊處を易へること。たじろぐ。
〔狼狽〕うろたへあわてる。

「是は難有う……」丈出して、向き直る途端に、女は二三歩退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描寫することに相場が極つてる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを列擧したならば、大藏經と其量を爭ふかも知れぬ。此辟易すべき多量の形容詞中から、余と三歩の隔りに立つ、體を斜めに捩つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めて居る女を、尤も適當に敍すべき用語を拾ひ來つたなら、どれ程の數になるか知れない。然し生れて三十餘年の今日に至るまで、未だかつてかゝる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に歸するさうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思ふ。動けばどう變化するか。風雲か、雷霆か、見わけのつかぬ所に餘韻が縹緲と存するから、含蓄の趣を百世の後に傳ふるのであらう。世上幾多の尊嚴と威儀とは、此湛然たる可能力の裏面に伏在し

〔端肅〕たゞしくおごそか。端嚴。
〔雷霆〕激しい雷。
〔餘韻縹緲〕餘情のかすかにとりとめ難いさま。
〔含蓄〕言外に深い意味を持つてゐること。
〔湛然〕タンゼン。落着いて靜かな貌。

て居る。動けばあらはれる。あらはるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能力には相違なからうが、既に一となり、二となり、三となつた曉には、拖泥帶水の陋を遺憾なく示して、本來圓滿の相に戻る譯には行かぬ。此故に動と名のつくものは必ず卑しい。運慶の仁王も、北齋の漫畫も、全く此動の一字で失敗して居る。動か靜か。是がわれ等畫工の運命を支配する大問題である。古來美人の形容も大抵此二大範疇のいづれにか打ち込む事が出來べき筈だ。

所が此女の表情を見ると、余はいづれとも判斷に迷つた。口は一文字を結んで靜である。眼は五分のすきさへ見出すべく動いて居る。顏は下膨（しもぶくれ）の瓜實形で、豊かに落ち付きを見せてゐるに引き替へて、額は狹苦しくも、こせ付いて、所謂富士額の俗臭を帶びて居る。のみならず眉は兩方から逼つて、中間に數滴の薄荷を點じたる如く、

〔拖泥帶水〕嚴羽の滄浪詩話「意貴透徹、不可隔靴搔痒、語貴脫洒、不可拖泥帶水」とある。澁滯拘束といふやうな意であらう。
〔運慶〕鎌倉時代の佛像彫刻家。「仁王」は如來の一切の秘密事迹を知り、五百の夜叉神を使役して、賢劫の千佛の法を護るといふ二つの神。金剛力士。
〔北齋〕江戸末期の浮世繪師。
〔範疇〕部屬の意。
〔瓜實形〕色白く中高でやゝ長い顏。
〔富士額〕女の額の髮の富士の形に似たもの。

〔亂調〕口元の鎭靜、瓜實顏の豐麗、鼻の穩健、眼の尖銳、額の齷齪とした俗臭、眉の神經質といつた靜と動との表情の雜然たる配合が、不統一で調子の揃はぬのをいふ。

〔機勢〕物事のはずみの勢ひ。

〔氣を負ふ〕勢ひをたのむこと。周太祖紀「爲レ人負レ氣好使レ酒」

びく〳〵焦慮て居る。鼻ばかりは輕薄に銳どくもない、遲鈍に丸くもない。畫にしたら美しからう。かやうに別れ〳〵の道具が皆一癖あつて、亂調にどや〳〵と余の雙眼に飛び込んだのだから、迷ふのも無理はない。

元來は靜であるべき大地の一角に缺陷が起つて、全體が思はず動いたが、動くは本來の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどらうとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心ならずも動きつづけた今日は、やけだから無理でも動いて見せると云はぬ許りの有樣が——そんな有樣がもしあるとすれば丁度此女を形容することが出來る。

それだから輕侮の裏に何となく人に縋りたい景色が見える。人を馬鹿にした樣子の底に愼み深い分別がほのめいてゐる。才に任せ、氣を負へば、百人の男子を物の數とも思はぬ勢の下から、溫和しい情けが吾知らず湧いて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る體だ。此女の顏に統一の感じのないのは、心に統一のない證據で、心に統一がないのは此女の世界に統一がなかつたのだらう。不幸に壓しつけられながら其不幸に打ち勝たうとしてゐる顏だ。不仕合な女に違ひない。

〔會釋〕挨拶する。首をたれて禮をする。

〔銀杏返〕髮の上を二つに分け、左右に曲げて輪形に結んだ髮の形。

「難有う」と繰り返しながら、一寸會釋した。

「ほゝ御部屋は掃除がしてあります。往つて御覽なさい。いづれ後程」

四

と云ふや否や、ひらりと腰をひねつて、廊下を輕氣に馳けて行つた。頭は銀杏返に結つて居る。白い襟がたぼの下から見える。帶の黑繻子は片側丈だらう。

〔友禪〕人や花鳥の模様をはでやかに染め出した染模様。
〔扱帶〕シゴキオビ。一丈程の長さの一幅の布を、そのまゝ扱いて用ゐる帶。
〔白隱和尙〕臨濟宗の高僧。享保二年京都の妙心寺の第一座となる。
〔遠良天釜〕チラデガマ。白隱の法話集。
〔伊勢物語〕平安朝初期の作。歌を中心とした戀物語。在原業平の作だとも、又、業平の作に後人の加筆したものだともいふ。
〔昨夕のうつゝ〕「うつゝ」は半睡半醒の狀態をいふ。「余が閉ぢてゐる瞼の云々」とあるをさす。

ぽかんと部屋へ歸ると、成程綺麗に掃除がしてある。一寸氣がかりだから、念の爲め戶棚をあけて見る。下には小さな用簞笥が見える。上から友禪の扱帶が半分垂れかゝつてゐるのは、誰か衣類でも取り出して急いで出て行つたものと解釋が出來る。扱帶の上部はなまめかしい衣裳の間にかくれて、先は見えない。片側には書物が少少詰めてある。一番上に白隱和尙の遠良天釜と、伊勢物語の一卷が並んでる。昨夕のうつゝは事實かも知れないと思つた。何氣なく座蒲團の上へ坐ると、唐木の机の上に例の寫生帖が鉛筆を挾んだ儘、大事さうにあげてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だらうと手に取る。

「海棠の露をふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふや朝鳥」とかいたものがある。鉛筆だから、書體はしかと解らんが、女にしては硬過ぎる。男にしては柔か過ぎる。おやと又吃驚する。

〔御曹子〕堂上家・武家などの子息の部屋住のものの敬稱。

次を見ると「花の影女の影の朧かな」の下に「花の影女の影を重ねけり」とつけてある。「正一位女に化けて朧月」の下には「御曹子女に化けて朧月」とある。眞似をした積りか、添削した氣か、風流の交りか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思はず首を傾けた。

後程と云つたから、今に飯の時にでも出て來るかも知れない。出て來たら樣子が少しは解るだらう。ときに何時だなと時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寐たものだ。是では午飯丈で間に合せる方が胃の爲めによからう。

右側の障子をあけて、昨夜の名殘はどの邊かなと眺める。海棠と鑑定したのは果して、海棠であるが、思つたよりも庭は狹い。五六枚の飛石を一面の靑苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持がよささうだ。左は山つづきの崖に赤松が斜めに岩の間から庭の上へさし出して居る。海棠の後ろには一寸した茂みがあつて、奥は大竹

籔が十丈の翠りを春の日に曝して居る。右手は屋の棟で遮られて、見えぬけれども、地勢から察すると、だら〳〵下りに風呂場の方へ落ちて居るに相違ない。

山が盡きて、丘となり、丘が盡きて、幅三丁程の平地となり、其平地が盡きて、海の底へもぐり込んで、十七里向ふへ行つて、また隆然と起き上がつて、周圍六里の摩耶島となる。是が那古井の地勢である。温泉場は丘の麓を出來る丈崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ圍ひ込んだ一構であるから、前面は二階でも、後は平屋になる。縁から足をぶらさげれば、すぐと踵は苔に着く。道理こそ昨夕は階子段を、無暗に上つたり、下つたり、異な仕掛の家と思つた筈だ。

今度は左側の窓をあける。自然と回む二疊計りの岩のなかに春の水がいつともなくたまつて、靜かに山櫻の影を蘸して居る。二株三株の熊笹が岩の角を彩どる。向ふに杞枸とも見える生垣があつて、外は濱から丘へ上る岨道か。時々人聲が聞える。往來の向ふはだら〳〵と南下がりに蜜柑を植ゑて、谷の窮まる所に、又大きな竹籔が白く光る。竹の葉が遠くから見ると白く光るとは、此時初めて知つた。籔から上は、松の多い山で、赤い幹の間から、石磴が五六段手にとる樣に見える。大方御寺だらう。

入口の襖をあけて縁へ出ると、欄干が四角に曲つて、方角から云へば海の見ゆべき筈の所に、中庭を隔てゝ、表二階の一間がある。わが住む部屋も、欄干に倚れば、矢張り同じ高さの二階なのには興が催される。湯壺は地の下にあるのだから、入湯と云ふ點から云へば、余は三層樓上に起臥する譯になる。

家は隨分廣いが、向ふ二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間の外は、居室臺所は知らず、客間と名がつきさうなのは、大抵立て切つてある。客は余をのぞくの外殆んど皆無なのだらう。

〔杞枸〕　枸杞（クコ）の誤。灌木の一種、高さ七八尺、淡紫色の花をつけ、赤い實を結ぶ、葉は食用、根は藥用となる。

〔岨〕　ソバ。けはしい山道。（がけ）

〔石磴〕　石段。

〔屈強〕「究竟」の意。極めて都合のよいこと。
〔空山不見人〕王維の詩、鹿柴「空山不見人、但聞人語響、返景入深林、復照青苔上」
〔一とかたけ〕一回の食事。
〔俳三昧〕俳境に專念沈潛すること。三昧は心を一境に安住せしめて動かないこと。味到體驗の境地である。
〔煦々〕溫かいこと。
〔外道〕佛徒が佛敎以外の諸敎學をいふ語であるが、爰は俗界をいふ。

締めた部屋は晝も雨戸をあけず。あけた以上は夜も閉てぬらしい。是では表の戸締りさへ、するかしないか解らん。非人情の旅にはもつて來いと云ふ屈强な場所だ。

時計は十二時近くなつたが、飯を食はせる氣色は更にない。漸く空腹を覺えて來たが、空山不見人と云ふ詩中にあると思ふと、一とかたげ位儉約しても遺憾はない。晝をかくのも面倒だ。俳句は作らんでも既に俳三昧に入つて居るから、作る丈野暮だ。讀まうと思つて三脚几に括りつけて來た二三冊の書籍もほどく氣にならん。かうやつて、煦々たる春日に背中をあぶつて、緣側に花の影と共に寐ころんで居るのが、天下の至樂である。考へれば外道に墮ちる。動くと危ない。出來るならば鼻から呼吸もしたくない。疊から根の生えた植物の樣にぢつとして二週間許り暮して見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か上つてくる。近づくのを聞いてゐると、二人らしい。それが部屋の前でとまつたなと思つたら、一人は何にも云はず元の方へ引き返す。襖があいたから、今朝の人と思つたら、矢張り昨夜の小女郎である。何だか物足らぬ。

〔逸事〕世に表はれない事實。

「遲くなりました」と膳を据ゑる。朝食の言譯も何にも言はぬ。燒肴に靑いものをあしらつて、椀の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め拔かれた、海老を沈ませてある。あゝ好い色だと思つて椀の中を眺めて居た。

「御嫌ひか」と下女が聞く。

「いゝや、今に食ふ」と云つたが、實際食ふのは惜しい氣がした。ターナーが或る晩餐の席で、皿に盛るサラドを見詰めながら、凉しい色だ、是がわしの用ゐる色だと傍の人に話したと云ふ逸事を、ある書物で讀んだ事があるが、此海老と蕨の色を、一寸ターナーに見せてやりたい。一體西洋の食物で色のいゝものは一つもない。あれ

〔獻立〕膳部に調ずる料理の種類と順序。
〔會席膳〕會席の料理を載せる膳で、方形で足がない。

ばサラドと赤大根位なものだ。滋養の點から云つたらどうか知らんが、畫家から見ると頗る發達せん料理である。そこへ行くと日本の獻立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物綺麗に出來る。會席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めた儘歸つても、目の保養から云へば、御茶屋へ上がつた甲斐は充分ある。

「うちに若い女の人が居るだらう」と椀を置きながら、質問をかけた。

「へえ」

「ありや何だい」

「若い奥様で御座んす」

「あの外にまだ年寄の奥様が居るのかい」

「去年御亡くなりました」

「旦那さんは」

「居ります。旦那さんの娘さんで御座んす」

「あの若い人がかい」

「へえ」

「御客は居るかい」

「居りません」

「わたし一人かい」

「へえ」

「若い奥さんは毎日何をして居るかい」

「針仕事を……」

「夫から」

「三味を彈きます」

是は意外であつた。面白いから又、

「夫から」と聞いて見た。

「御寺へ行きます」と小女郎が云ふ。

是は又意外である。御寺と三味線は妙だ。

「御寺詣りをするのかい」

「いゝえ、和尚様の所へ行きます」

「和尚さんが三味線でも習ふのかい」

「いゝえ」

「ぢや何をしに行くのだい」

「大徹様の所へ行きます」

なある程、大徹と云ふのは此額を書いた男に相違ない。此句から察すると何でも禪坊主らしい。戸棚に遠良天釜があつたのは、全くあの所持品だらう。

「此部屋は普段誰か這入つて居る所かね」

「普段は奥様が居ります」

「それぢや、昨夕、わしが來る時迄こゝに寢たのだね」

「へえ」

「それは御氣の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行くのかい」

「知りません」

「それから」

「何で御座んす」

「それから、まだ外に何かするのだらう」

「それから、色々……」

「色々つて、どんな事を」

「知りません」

會話は是で切れる。飯は漸く了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開けたら、中庭の栽込みを隔てて、向ふ二階の欄干に、銀杏

〔楊柳觀音〕　三十三觀音の一。衆生の願望に隨ふこと、柳枝の風に靡くやうであるとの意。右手に柳の枝を持ち、左手に施無畏の印を結んでゐる。

〔眸子〕　ボウシ。瞳子に同じ。孟子、離婁章句上、「存ニ於人一者、莫レ於ニ眸子一、眸子不レ能レ掩ニ其惡一」

〔人焉んぞ庾さんや〕　人は其情を隱すことは出來ないとの意。論語、爲政篇「子曰、視ニ其所一レ以、觀ニ其所一レ由、察ニ其所一レ安、人焉庾哉、人焉庾哉」

〔亞字欄〕　亞の字の形のやうに切り組んだ欄干。

〔Sadder than is the moon's lost light.〕　此詩の出典は不詳。意味は。旅をつゞける旅人に、消えた嫦娥の光より、悲しく失せる黎明の火は、汝が美しき顏見えぬごと。

返しが頰杖を突いて、開化した楊柳觀音の樣に下を見詰めて居た。今朝に引き替へて、甚だ靜かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通はないから、相好に斯程な變化を來たしたものであらうか。昔の人は、人に存するもの眸子より良きはなしと、云つたさうだが、成程人焉んぞ庾さんや。人間のうちで眼程活きて居る道具はない。寂然と倚る亞字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞ひ上がる。途端にわが部屋の襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然と蝶から眼を余の方に轉じた。視線は毒矢の如く空を貫いて、會釋もなく余が眉間に落ちる。はつと思ふ間に、小女郎が、又はたと襖を立て切つた。あとは至極呑氣な春となる。

余は又ごろり寢ころんだ。忽ち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,
Lost are the kindling of dawn,

〔Might I look on thee in death,〕　死していましを見るべくば、われよろこびて命さゝげん。

To travellers journeying on,
The shutting of thy fair face from my sight.

と云ふ句であつた。もし余があの銀杏返しに懸想して、身を碎いても逢はんと思ふ矢先に、今の樣な一瞥の別れを、魂消る迄に、嬉しとも、口惜しとも感じたら、余は必ずこんな意味をこんな詩に作るだらう。其上に、

Might I look on thee in death,
With bliss I would yield my breath.

と云ふ二句さへ、付け加へたかも知れぬ。幸ひ普通ありふれた、戀とか愛とか云ふ境界は既に通り越して、そんな苦しみは感じたくても感じられない。然し今の刹那に起つた出來事の詩趣は、たしかに此五六行にあらはれて居る。余と銀杏返しの間柄にこんな切ない思ひはないとしても、二人の今の關係を、此詩の中に適用(あてはめ)て見るのは

〔因果〕原因と結果。佛敎では、一切の萬有は因果の法則によつて生滅變化するといふ。爰は、因緣といふ程の意、

〔因果の相手〕因緣の糸によつて繫がれてゐる二人の中の片方。

面白い。或は此詩の意味をわれらの身の上に引きつけて解釋しても愉快だ。二人の間にはある因果の細い絲で、此詩にあらはれた境遇の一部分が、事實となつて、括りつけられて居る。因果も此位絲が細いと苦にはならぬ。其上、只の絲ではない。空を横切る虹の絲、野邊に棚引く霞の絲、露にかゞやく蜘蛛の絲、切らうとすればすぐ切れて、見て居るうちは勝れてうつくしい。萬一此絲が見る間に太くなつて、井戸繩の樣にかたくなつたら？　そんな危險はない。余は畫工である。先は只の女と違ふ。

突然襖があいた。寢返りを打つて入口を見ると、因果の相手の其銀杏返しが、敷居の上に立つて、青磁の鉢を盆に乘せたまゝ佇んで居る。「また寢て入らつしやるか。夕は御迷惑で御座んしたらう。何遍も御邪魔をして。ほゝゝゝ」と笑ふ。臆した氣色も、隱す氣色も——恥づる氣色は無論ない。只こちらが先を越されたのみである。

〔丹前〕褞袍。

〔氣作〕性質擧動の快活で打解けてゐること。

〔肘壺の柱〕「肘壺」は、鐵で壺のやうに作り、扉にうちつけ、肘金と相合うて戸を開閉するもの、即ち開き戸の樞に用ゐる具である。爰は肘を立てゝ兩手で顎を支へてゐる肘柱を「肘壺の柱」と云うたもの。

〔玉〕支那邊東地方に產する塊狀角閃岩の一種で、瑪瑙に似て、色は多く淡灰又は淡綠、光澤があり、刀劍その他の裝飾に用ゐる。

「今朝は難有う」と又禮を云つた。考へると、丹前の禮を是で三遍云つた。しかも、三遍ながら、只難有うと云ふ三字である。

女は余が起き返らうとする枕元へ、早くも坐つた。

「まあ寢て入らつしやい。寢て居ても話は出來ませう」と、さも氣作に云ふ。余も全くだと考へたから、一先づ腹這ひになつて、兩手で顎を支へ、しばし疊の上へ肘壺の柱を立てる。

「御退屈だらうと思つて、御茶を入れに來ました」

「難有う」又難有うが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹が並んでゐる。余は凡ての菓子のうちで尤も羊羹が好きだ。別段食ひたくはないが、あの肌合が滑らかに緻密に、しかも半透明に光線を受ける工合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帶びた煉り上げ方は、玉と蠟石の雜種の樣で、甚だ見て心持ちがいゝ。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなかから今生れた

〔言語道斷〕眞理の奥深くて言語に說明出來ぬ意。轉じて、以つての外、とんでもないの意。

〔遜色〕ひけをとるやうす。

様につやつやして、思はず手を出して撫でゝ見たくなる。西洋の菓子で、これ程快感を與へるものは一つもない。クリームの色は一寸柔かだが、少し重苦しい。ジエリは一見寶石の様に見えるが、ぷるぷる顫へて、羊羹程の重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作るに至つては、言語道斷の沙汰である。

「うん、中々美事だ」

「今しがた、源兵衛が買つて歸りました。是ならあなたに召し上がられるでせう」

源兵衛は昨夕城下へ留つたと見える。余は別段の返事もせず、羊羹を見て居た。どこで誰れが買つて來ても構ふことはない。只美しければ、美しいと思ふ丈で充分滿足である。

「此青磁の形は大變いゝ。色も美事だ。殆んど羊羹に對して遜色がない」

〔余の言葉を洒落云々〕「色も見事だ」といひ。「遜色がない」といつたのをさす。

女はふゝんと笑つた。口元に侮どりの波が微かに搖れた。余の言葉を洒落と解したのだらう。成程洒落とすれば、輕蔑される價は慥かにある。智慧の足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を云ふものだ。

「是は支那ですか」

「何ですか」と、相手は丸で青磁を眼中に置いて居ない。

「どうも支那らしい」と、皿を上げて底を眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せませうか」

「えゝ、見せて下さい」

「父が骨董が大好きですから、大部色々なものがあります。父にさう云つて、いつか御茶でも上げませう」

茶と聞いて少し辟易した。世間に茶人程勿體振つた風流人はない。廣い詩界をわざとらしく窮屈に繩張りをして、極めて自尊的に、極

〔鞠躬如〕身をかゞめて敬ひ愼しむ貌。
〔茶人〕茶の湯を好む人。轉じて、一風變つた人。
〔煩瑣〕くだ〳〵しくわづらはしい。
〔雅味〕みやびやかな趣。風雅。
〔麻布の聯隊云々〕軍隊生活は煩瑣な規則づくめの形式萬能の生活であるから、茶道の形式的規則的の點に對して、かく皮肉を言つたもの。
〔大茶人〕大風流人。
〔利休〕千宗易。幼より茶道を學び、初め信長に仕へ、次いで、秀吉に眷遇せられ、後、不遜及び姦利の罪により、秀吉より死を賜はり、花を活け茶を點じ、絶命の偈を賦して割腹した。

めてことさらに、極めてせゝこましく、必要もないのに鞠躬如として、あぶくを飲んで結構がるものが、所謂茶人である。あんな煩瑣な規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊のなかは雅味で鼻がつかへるだらう。廻れ右、前へ、の連中は、悉く大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、丸で趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見當が付かぬ所から、器械的に利休以後の規則を鵜呑みにして、是で大方風流なんだらうと、却つて眞の風流人を馬鹿にする爲めの藝である。

「御茶つて、あの流儀のある茶ですかな」

「いゝえ、流儀もなにもありやしません。御厭なら飲まなくてもいい御茶です」

「そんなら、序に飲んでもいゝですよ」

「ほゝゝゝ。父は道具を人に見て頂くのが大好きなんですから……」

「褒めなくちやあ、いけませんか」

「年寄りだから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」

「へえ、少しなら褒めて置きませう」

「負けて澤山御褒めなさい」

「はゝゝゝ、時にあなたの言葉は田舍ぢやない」

「人間は田舍なんですが」

「人間は田舍の方がいゝのです」

「それぢや幅が利きます」

「然し東京に居た事がありませう」

「えゝ、居ました。京都にも居ました。渡りものですから、方々に居ました」

「こゝと都と、どつちがいゝですか」

「同じ事ですわ」

〔蚤の國が厭に云々〕人間に苦はつき物だ。蚤の國と蚊の國との喩は面白い。最初の「どこへ越しても住みにくいと悟つた時」とあるに照應してゐる。

「かう云ふ靜かな所が、却つて氣樂でせう」

「氣樂も、氣樂でないも、世の中は氣の持ち樣一つで、どうでもなります。蚤の國が厭になつたつて、蚊の國へ引越しちや、何にもなりません」

「蚤も蚊も居ない國へ行つたら、いゝでせう」

「そんな國があるなら、こゝへ出して御覽なさい。さあ出して頂戴」と女は詰め寄せる。

「御望みなら、出してあげませう」と例の寫生帖をとつて、女が馬へ乘つて、山櫻を見て居る心持ち——無論咄嗟の筆使ひだから、畫にはならない。只心持ち丈をさら〳〵と書いて、

「さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊も居ません」と鼻の前へ突き付けた。驚くか、恥しがるか、此樣子では、よもや、苦しがる事はなからうと思つて、一寸氣色を伺ふと、

〔蟹〕横幅ばかりの窮屈な世界に住む者を蟹に譬へたのである。

「まあ、窮屈な世界だこと。横幅ばかりぢやありませんか。そんな所が御好きなの、丸で蟹ね」と云つて退けた。余は、

「わはゝゝゝ」と笑ふ。軒端に近く、啼きかけた鶯が、中途で聲を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと對話をやめて、しばらく耳を峙てたが、一旦鳴き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「昨日は山で源兵衛に御逢ひでしたらう」

「えゝ」

「長良の乙女の五輪塔を見て入らしつたか」

「えゝ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほゆるかも」と、說明もなく、女はすらりと節もつけずに、歌丈述べた。何の爲めか知らぬ。

「其歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが敎へましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、私がまだ嫁に……」と云ひかけて、是はと、余の顏を見たから、余は知らぬ風をして居た。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが來るたびに、長良の話をして聞かせてやりました。うた丈は中々覺えなかつたのですが、何遍も聽くうちに、とう〳〵何も彼も諳誦して仕舞ひました」

「どうれで、六づかしい事を知つてると思つた。——然しあの歌は憐れな歌ですね」

「憐れでせうか。私ならあんな歌は詠みませんね。第一、淵川へ身を投げるなんて、つまらないぢやありませんか」

「成程つまらないですね。あなたなら如何(ざう)しますか」

「どうするつて、譯ないぢやありませんか。さゝだ男もさゝべ男も、男妾にする許りですわ」

「兩方ともですか」

「えゝ」

「えらいな」

「えらかあない。當り前ですわ」

「成程、夫れぢや蚊の國へも蚤の國へも、飛び込まずに濟む譯だ」

「蟹の樣な思ひをしなくつても、生きてゐられるでせう」

ほうほけきよと、忘れかけた鶯が、いつ勢を盛り返してか、時ならぬ高音を不意に張つた。一度立て直すと、あとは自然に出ると見える。身を逆まにして、ふくらむ咽喉の底を震はして、小さき口の張り裂くる許りに、

ほーう、ほけきよーう。ほーう、ほけつーきよーう

と、つゞけ樣に囀づる。

「あれが本當の歌です」と女が余に敎へた。

〔生粹〕鰁背で、昔、江戸の魚河岸の勇み肌の人々が、髷を鰁背銀杏といつて、魚の鰁の頭に似せて結うた所から、やがて勇み肌のことを「いなせ」と云ふやうになつた。「否諾」の意ではない。

五

「失禮ですが旦那は矢張り東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいつて、一目見りやあ、――第一言葉でわかりまさあ」

「東京は何處だか知れるかい」

「さうさね。東京は馬鹿に廣いからね。――何でも下町ぢやねえやうだ。山の手だね。山の手は麹町かね。え？　それぢや、小石川？でなければ、牛込か四つ谷でせう」

「まあそんな見當だらう。よく知つてるな」

「かう見えて、私も江戸つ子だからね」

「道理で生粹だと思つたよ」

「えへゝゝ。からつきし、どうも、人間もかうなつちや、みじめですせ」

「何で又こんな田舍へ流れ込んで來たのだい」

「ちげえねえ、旦那の仰しやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すつかり食ひ詰めつちまつて……」

「固から髮結床の親方かね」

「親方ぢやねえ、職人さ。え？所かね。所は神田松下町でさあ。なあに、猫の額見た樣な小さな汚え町でさあ。旦那なんか知らねえ筈さ。あすこに龍閑橋てえ橋がありませう。え？そいつも知らねえかね。龍閑橋や、名代な橋だがね」

「おい、もう少し、石鹼を塗けて呉れないか。痛くつて、いけない」

「痛うがすかい。私や癇性でね、どうも、かうやつて、逆剃をかけて、一本々々髭の根を掘らなくつちや、氣が濟まねえんだから、――なあに今時の職人なあ、剃るんぢやねえ、撫でるんだ。もう少しだ

〔松下町〕流布本には「松永町」とある。

〔癇性〕神經質。

我慢おしなせえ」

「我慢は先から、もう大分したよ。御願だから、もう少し湯か石鹸をつけとくれ」

「我慢しきれねえかね。そんなに痛かねえ筈だが。全體、髭があんまり、延び過ぎてるんだ」

やけに頰の肉をつまみ上げた手を、殘念さうに放した親方は、棚の上から、薄つ片な赤い石鹸を取り卸して、水のなかに一寸浸したと思つたら、夫なり余の顔をまんべんなく一應撫で廻した。裸石鹸を顔へ塗り付けられた事はあまりない。然もそれを濡らした水は、幾日前に汲んだ、溜め置きかと考へると、餘りぞつとしない。

既に髮結床である以上は、御客の權利として、余は鏡に向はなければならん。然し余はさつきから此權利を放棄したく考へて居る。鏡と云ふ道具は平らに出來て、なだらかに人の顔を寫さなくては義理が立たぬ。もし、此性質が具らない鏡を懸けて、之に向へと強ひるならば、強ひるものは下手な寫眞師と同じく、向ふものゝ器量を故意に損害したと云はなければならぬ。虛榮心を挫くのは、修養上一種の方便かも知れぬが、何も己れの眞價以下の顔を見せて、是があなたですよと、此方を侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合ふべく餘儀なくされて居る鏡は、慥かに最前から余を侮辱して居る。右を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元まで裂ける。仰向くと、蟇蛙を前から見た樣に眞平に壓し潰され、少しこゞむと、福祿壽の祈誓兒の樣に頭がせり出してくる。苟も此鏡に對する間は、一人で色々な化物を兼勤しなくてはならぬ。寫るわが顔の美術的ならぬは、先づ我慢するとしても、鏡の構造やら、色合や、銀紙の剝げ落ちて、光線が通り拔ける模樣抔を、總合して考へると、此道具その物からが醜體を極めて居る。小人から罵詈されるとき、罵詈其

〔器量〕　容姿。顏つき。

〔蛙蟇〕　ひきがへる。

〔福祿壽〕　七福神の一。短身で頭が長く髯を多く生やしてゐる。

〔祈誓兒〕　神佛に願をかけて生れた子。爰は頭がせり出して長く見える所から、長頭の福祿壽の申し子と云うたもの。

〔せり出して〕　徐々に突出すること。

〔痛痒を感ぜぬ〕　痛くもかゆくも感じない。何の感じも起らぬ。

れ自身は別に痛痒を感せぬが、其小人の面前に起臥しなければならぬとすれば、誰しも不愉快だらう。

其上此親方が只の親方ではない。そとから覗いたときは、胡坐をかいて、長烟管で、おもちやの日英同盟國旗の上へ、しきりに烟草を吹きつけて、さも退屈氣に見えたが、這入つて、わが首の所置を托する段になつて驚いた。髭を剃る間は首の所有權は全く親方の手にあるのか、將た幾分かは余の上にも存するのか。一人で疑ひ出した位、容赦なく取り扱はれる。余の首が肩の上に釘付けにされて居るにしても、是では永く持たない。

彼は髮剃を揮ふに當つて、毫も文明の法則を解して居らん。頰にあたる時はがり〻と音がした。揉み上の所では、ぞきりと動脈が鳴つた。顋のあたりに利刃がひらめく時分には、ごり〳〵、ごり〳〵と、霜柱を踏みつける樣な怪しい聲が出た。しかも本人は日本一の

〔揉み上〕　鬢の毛の耳に添うて生えさがつた處。

手腕を有する親方を以て自任して居る。

最後に彼は醉つ拂つてゐる。旦那えと云ふたんびに、妙な臭ひがする。時々は異な瓦斯を余が鼻柱へ吹き掛ける。是では、いつ何時、髭剃がどう間違つて、何所へ飛んで行くか解らない。使ふ當人にさへ判然たる計畫がない以上は、顏を貸した余に推察の出來樣筈がない。得心づくで任せた顏だから、少しの我慢なら苦情は云はない積だが、急に氣が變つて咽喉笛でも搔き切られては事だ。

「石鹼なんぞをつけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那のは、髭が髭だから仕方があるめえ」と云ひながら、親方は裸石鹼を、裸の儘棚の上へ放り出すと、石鹼は親方の命令に背いて地面の上へ轉がり落ちた。

「旦那あ、餘り見受けねえ樣だが、何ですかい、近頃來なすつたのかい」

〔得心づく〕　「得心」は、承知、なつとく。「づく」は接尾語。

〔御新造〕「新造」は、新婦人の稱、又は人の妻の敬稱。妻を迎へる前に新に妻屋を建てる風習のあつた時代の名殘の言葉である。

「二三日前來た許りさ」
「へえ、どこに居るんですかい」
「志保田に逗つてるよ」
「うん、あすこの御客さんですか。大方そんな事だらうと思つてた。實あ、私もあの隱居さんを賴つて來たんですよ。なにね、あの隱居が東京に居た時分、わつしが近所にゐて、——それで知つてるのさ。いゝ人でさあ、ものゝ解つたね。去年御新造が死んぢまつて、今ぢや道具ばかり捻くつてるんだが——何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。賣つたら餘程な金目だらうつて話さ」
「綺麗な御孃さんが居るぢやないか」
「あぶねえね」
「何が？」
「何がつて、旦那の前だが、あれで出返りですせ」

〔頰返し〕頰張つたものを咀嚼すること。又は、都合をつけること。

「さうかい」
「さうかい所の騷ぢやねえんだね。全體なら出て來なくつてもいゝ所をさ。——銀行が潰れて、贊澤が出來ねえつて、出ちまつたんだから、義理が惡るいやね。隱居さんがあゝして居るうちはいゝが、もしもの事があつた日にや、頰返しがつかねえ譯になりまさあ」
「さうかな」
「當り前でさあ。本家の兄たあ、仲がわるしさ」
「本家があるのかい」
「本家は岡の上にありまさあ。遊びに行つて御覽なさい。景色のいい所ですよ」
「おい、もう一遍石鹼をつけてくれないか。又痛くなつて來た」
「よく痛くなる髭だね。髭が硬過ぎるからだ。旦那の髭ぢや、三日に一度は是非剃を當てなくつちや駄目ですせ。わつしの剃で痛けり

や、何所へ行つたつて、我慢出來つこねえ」
「是から、さうしよう。何なら毎日來てもいゝ」
「そんなに長く逗留する氣なんですか。あぶねえ。およしなせえ。益もねえ事つた。碌でもねえものに引つかかつて、どんな目に逢ふか解りませんせ」
「どうして」
「旦那あの娘は面はいゝ樣だが、本當は、き印しですせ」
「なぜ」
「なぜつて、旦那。村のものは、みんな氣狂だつて云つてるんでさあ」
「そりや何かの間違ひだらう」
「だつて、現に證據があるんだから、御よしなせえ。けんのんだ」
「おれは大丈夫だが、どんな證據があるんだい」
「可笑しな話しさね。まあゆつくり、煙草でも呑んで御出でなせえ話すから。——頭あ洗ひませうか」
「頭はよさう」
「頭垢丈落して置くかね」

〔不毛の境〕「不毛」は、五穀の生じないやせ地。境确。爰は草木のない土地。
〔蚯蚓腫〕ミミズバレ。肌がみゝずの形のやうに腫れ赤らむこと。
〔震盪〕シンタウ。ふるひ動く。
〔辣腕〕すごい腕まへ。

親方は垢の溜つた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に並べて、斷りもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。此爪が、黑髮の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を、巨人の熊手が、疾風の速度で通る如くに往來する。余が頭に何十萬本の髮の毛が生えて居るか知らんが、ありとある毛が悉く根こぎにされて、殘る地面が、べた一面に蚯蚓腫にふくれ上つた上、餘勢が地盤を通して、骨から腦味噌迄震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を搔き廻はした。
「どうです、好い心持でせう」
「非常な辣腕だ」
「え？かうやると誰でも薩張りするからね」

〔やに〕「いやに」の略。江戸兒の言葉。

〔見境〕ミサカヒ。物事の見わけ。

〔がんがらかん〕倉や家の内部の物がなくなつて空虚なさま、爰は、まとまりのない意。

〔納所坊主〕寺院で寺務を取扱ふ所を納所といひ、又、寺務を取扱ふ僧をいふ。

「首が拔けさうだよ」

「そんなに倦怠うがすかい。全く陽氣の加減だね。どうも春てえ奴あ、やに身體がなまけやがつて――まあ一ぷく御上んなさい。一人で志保田に居ちや、退屈でせう。ちと話に御出でなせえ。どうも江戸つ子は江戸つ子同士でなくつちや、話が合はねえものだから。何ですかい、矢つ張りあの御嬢さんが、御愛想に出てきますかい。どうも薩ぱし、見境のねえ女だから困つちまはあ」

「御嬢さんが、どうとか爲た所で、頭垢が飛んで、首が拔けさうになつたつけ」

「違えねえ、がんがらかんだから、殼切、話に締りがねえつたらねえ。――そこで其坊主が逆せちまつて……」

「其坊主たあ、どの坊主だい」

「觀海寺の納所坊主がさ……」

〔住持〕一寺院の主たる僧。住職。寺に住んでその寺を維持する意。

〔殊勝〕けなげ。神妙。

「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て來ないんだ」

「さうか、急勝だから、いけねえ。苦味走つた、色の出來さうな坊主だつたが、そいつが御前さん、レコに參つちまつて、とう〳〵文をつけたんだ。――おや待てよ。口說いたんだつけかな。いんにや、文だ。文に違えねえ。すると――かうつと――何だか、行きさつが少し變だぜ。うん、さうか、矢つ張りさうか。するてえと奴さん、驚いちまつてからに……」

「誰が驚いたんだい」

「女がさ」

「女が文を受け取つて驚いたんだね」

「所が、驚く樣な女なら、殊勝らしいんだが、驚くどころぢやねえ」

「ぢや誰が驚いたんだい」

「口説いた方がさ」
「口説かないのぢやないか」
「えゝ焦心(ぢれ)つてえ。間違つてらあ。文をもらつてさ」
「それぢや矢つ張り女だらう」
「なあに男がさ」
「男なら其坊主だらう」
「えゝ、其坊主がさ」
「坊主がどうして驚いたのかい」
「どうしてつて、本堂で和尚さんと御經を上げてると、突然(いきなり)あの女が飛び込んで來て――ウフ……。どうしても狂印(きじるし)だね」
「どうかしたのかい」
「そんなに可愛いなら、佛様(ほとけさま)の前で、一所に寐ようつて、出し抜けに、泰安さんの頸つ玉へかじりついたんでさあ」

〔冴えねえ〕 爰は、死に榮えのしない意であらう。
〔洒啞々々〕 恥を恥とも思はぬこと。鐵面皮。

「へえゝ」
「面喰つたなあ、泰安さ。氣狂に文をつけて、飛んだ恥を掻かせられて、とうとう、其晩こつそり姿を隱して死んぢまつて……」
「死んだ？」
「死んだらうと思ふさ。生きちや居られめえ」
「何とも云へない」
「さうさ相手が氣狂ぢや、死んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」
「中々面白い話だ」
「面白いの、面白くないのつて、村中大笑でさあ。所が當人丈は、根が氣が違つてるんだから、洒啞(しやあ)々々して平氣なもんで――なあに旦那の様に確然(しつかり)してゐりや大丈夫ですがね。相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大變な目に逢ひますよ」

〔二尺あまりの陽炎云々〕春の陽炎の燃えてゐる空間を横切つて二尺程向ふへ飛ぶのをいふ。

「ちつと氣を付けるかね。はゝゝゝ」

生温い磯から、鹽氣のある春風が、ふわり〳〵と來て、親方の暖簾を眠たさうに煽る。身を斜にして其下をくゞり抜ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向ふの家では、六十許りの爺さんが、軒下に蹲踞り乍ら、だまつて貝をむいて居る。かちやりと、小刀があたる度に、赤い身が笊のなかに隱れる。殼はきらりと光りを放つて、二尺あまりの陽炎を向へ横切る。丘の如くに堆かく、積み上げられた、其の殼は牡蠣か、馬鹿か、馬刀貝か。崩れた幾分は砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗い國へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末を考ふる暇さへなく、唯空しき殼を陽炎の上へ放り出す。彼れの笊には、支ふべき底なくして、彼れの春の日は、無盡藏に長閑かと見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、濱の方へ春の水をそゝぐ。

〔參差〕シンシ。長短齊しくない貌。
〔鈍刀を云々〕灰色に光る海の形容。
〔のたくらせる〕春の海日ねもすのたり〳〵かな〔蕪村〕
〔拮抗〕キツコウ。張り合ふこと。
〔圓枘方鑿〕エンゼイハウサク。丸い栓と四角なほぞあな。和合しないこと。史記、孟軻傳「持三方枘一欲レ内二圓鑿一、其能入乎」とあつて、圓鑿方枘である。
〔渾然〕圭角のない貌、又は差別のない貌。
〔駘蕩〕春の長閑な貌。又は、廣大な貌。
〔怡々〕やはらぎよろこぶ貌。
〔氷炭〕楚辭「冰炭不レ可二以相並一兮」後漢書「亦猶二冰炭之不レ可レ同レ器」炭は火。

春の水が春の海と出合ふあたりには、參差として幾尋の干網が、網の目を拔けて村へ吹く軟風に、腥さ微温を與へつゝあるかと怪しまれる。その間から、鈍刀を溶かして、氣長にのたくらせた樣に見えるのが海の色だ。

此景色と此親方とは到底調和しない。もし、此親方の人格が强烈で、四邊の風光と拮抗する程の影響を、余の頭腦に與へたならば、余は兩者の間に立つて、頗る圓枘方鑿の感に打たれただらう。幸にして親方は左程偉大な豪傑ではなかつた。いくら江戸つ子でも、どれ程たんかを切つても、此渾然として駘蕩たる天地の大氣象には叶はない。滿腹の饒舌を弄して、あく迄此調子を破らうとする親方は、早くも微塵となつて、怡々たる春光の裏に浮遊して居る。矛盾とは、力に於て、若くは意氣體軀に於て、氷炭相容るゝ能はずして、しかも同程度に位する物、若しくは人の間に在つて、始めて見出し得

〔漸盡鞏磨〕 シジンロウマ。漸盡は氷の解け盡くる如く滅びること。鞏磨はみがくこと、爰は、磨滅する意。
〔大人の手足云々〕 漸層法、反覆法、脚韻法、連鎖法を併用してゐる。
〔昧者〕 愚か者。
〔刻意〕 剋意と同じく、心を苦しめる意。爰は深刻の意。
〔彌生〕 陰暦三月の異名。

べき現象である。兩者の間隔が甚しく懸絶するときは、此矛盾は漸く漸盡鞏磨して、却つて大勢力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人の手足となつて才子が活動し、才子の股肱となつて昧者が活動し、昧者の心腹となつて牛馬が活動し得るのは、是が爲めである。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じてゐる。長閑な春の感じを壞すべき筈の彼は、却つて長閑な春の感じを刻意に添へつゝある。余は思はず彌生半ばに、呑氣な彌次と近付になつた樣な氣持ちになつた。此極めて安價なる氣焰家は、太平の象を具したる春の日に、尤も調和せる一彩色である。

かう考へると、此親方も、中々畫にも詩にもなる男だから、とうに歸るべき所を、わざと尻を据ゑて、四方八方の話をして居た。所へ暖簾を滑つて小さな坊主頭が、

「御免、一つ剃つて貰はうか」

〔丸絎〕 マルグケ。丸くくけて綿を入れた帶。
〔道草食ふ〕 人が道を行きながら、ひまを費すこと。

と這入つて來る。白木綿の着物に同じ丸絎の帶をしめて、上から蚊帳の樣に粗い法衣を羽織つて、頗る氣樂に見える小坊主であつた。

「了念さん。どうだい、此間あ道草あ食つて、和尚さんに叱られたらう」

「いんにや、褒められた」

「使に出て、途中で魚なんか、とつて居て、了念は感心だつて、褒められたのかい」

「若いに似ず了念は、よく遊んで來て感心ぢや云うて、老師が褒められたのよ」

「道理で頭に瘤が出來てらあ。そんな不作法な頭あ、剃るなあ骨が折れていけねえ。今日は勘辨するから、此次から、捏ね直して來ねえ」

「捏ね直す位なら、ますこし上手な床屋へ行きます」

「はゝゝゝ頭は凹凸だが、口丈は達者なもんだ」
「腕は鈍いが、酒丈強いのは御前だろ」
「篦棒め、腕が鈍いつて……」
「わしが云ふのぢやない。老師が云はれたのぢや。さう怒るまい。年甲斐もない」
「へン、面白くもねえ。——ねえ旦那」
「えゝ？」
「全體坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがつて、屈托がねえから、自然に口が達者になる譯ですかね。こんな小坊主迄中々口幅つてえ事を云ひますぜ——おつと、もう少し頭を寢かして——寢かすんだてえのに、言ふ事を聽かなけりや切るよ。いゝか、血が出るぜ」
「痛いがな。さう無茶をしては」

〔口幅つてえ〕身の程を顧みずにおほ口をきくこと。

「此位な辛抱が出來なくて坊主になれるもんか」
「坊主にはもうなつとるがな」
「まだ一人前ぢやねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死んだつけな、御小僧さん」
「泰安さんは死にはせんがな」
「死なねえ？はてな。死んだ筈だが」
「泰安さんは、その後發憤して陸前の大梅寺へ行つて、修行三昧ぢや。今に知識になられよう。結構な事よ」
「なにが結構だ。いくら坊主だつて、夜逃げをして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく氣をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印は矢つ張り和尚さんの所へ行くかい」
「狂印と云ふ女は聞いた事がない」

〔修行三昧〕佛道の修行に專心してゐること。
〔知識〕事理を辨へて善く人を導く識者。名僧。

〔味噌擂〕　味噌擂坊主の略。寺院の炊事などに使はれる僧侶。又は、僧侶を嘲つていふ語。

〔石段をあがると〕　觀海寺は石段を上つた高い所にある所から、かういふのである。

〔口の減らねえ〕　言ひこめられても猶負けまいと返答すること。負け惜しみをいふこと。

〔乾屎橛〕　不淨を拭ふ木片

「通じねえ、味噌擂だ。行くのか、行かねえのか」

「狂印は來んが、志保田の娘さんなら來る」

「いくら、和尚さんの御祈禱でもあれ許りや、癒るめえ。全く先の旦那が祟つてるんだ」

「あの娘さんはえらい女だ。老師がよう褒めて居られる」

「石段をあがると、何でも逆樣(さかさま)だから叶はねえ。和尚さんが、何て云つたつて、氣狂は氣狂だらう。――さあ剃れたよ。早く行つて和尚さんに叱られて來ねえ」

「いやもう少し遊んで行つて賞められよう」

「勝手にしろ、口の減らねえ餓鬼だ」

「咄この乾屎橛」

「何だと？」

青い頭は既に暖簾をくゞつて、春風に吹かれて居る。

〔霞の國云々〕　以下詩的幻想である。「霞の國」も「雲の國」も共に世俗を超越した世界をさすので「世外の交」を雲霞之交といひ、世俗を脱して雲深き處に棲むを「雲棲」仙人を「雲客」仙人の居る所を「霞洞」などいふ事から暗示を受けたものであらう。「雲と水が云々」とあるは常世國などを頭に置いたものか。仙人の住む國を常世國ともいふ。或は「雲の國」は Cloud land の譯で、「霞の國」は「雲の國」からの思ひつきであらうか、Cloud land は無何有之鄕の意。

〔四大〕　一切の色法を構成する種因となる四つの成分、地・水・火・風をいふ。

六

夕暮の机に向ふ。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞ふ境を、幾曲の廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩にはならぬ。今日は一層靜かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを殘して、立ち退いたかと思はれる。立ち退いたとすれば唯の所へ立ち退きはせぬ。霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水が自然に近付いて、舵をとるさへ懶き海の上を、いつ流されたとも心づかぬ間に、白い帆が、雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、果ては帆みづからが、いづこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ――そんな遙かな所へ立ち退いたと思はれる。夫でなければ卒然と春のなかに消え失せて、是迄の四大が、今頃は目

〔靈氛〕　靈氣。

〔紫〕　紫色の雲。

〔永き日を……虻のつとめ〕　蜜を吸ふ虻のやうに、永い春日を終日花のほとりに遊んで、家に歸るを忘れるのんびりとした趣をさすのであらう。

〔稲妻の米噛に震ふ〕　稲妻の閃いて、それが爲に顳顬のふるへるのをいふ。

〔一分〕　その人の面目、又は職責。その人一人だけの分際。

に見えぬ靈氛となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、些の名殘を留めぬ樣になつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き盡したる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。又は永き日を、かつ永くする虻のつとめを果したる後、蓋に凝る甘き露を吸ひ損ねて、落椿の下に、伏せられ乍ら、世を香しく眠つて居るかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

空しき家を、空しく拔ける春風の、拔けて行くは、迎へる人への義理でもない、拒むものへの面當でもない。自から來りて、自から去る公平なる宇宙の意である。掌に顎を支へたる余の心も、わが住む部屋の如く空しければ、春風は招かぬに、遠慮もなく行き拔けるであらう。

踏むは地と思へばこそ、裂けはせぬかとの氣遣ひも起る。戴くは天と知る故に、稲妻の米噛に震ふ怖れも出來る。人と爭はねば一分が立

〔火宅〕　衆生の五濁の苦を火に、三界を宅に喩へる。火宅の苦は浮世の苦。

〔所謂樂しみは云々〕　浮世の俗事に執着するから、苦樂の感情を伴ふ。

〔待對世界〕　同じ程度のものが對立する世界。五の樂みには五の苦が對立するをいふ。人生はこの待對世界である「待對世界の精華」とは、人生のすぐれて美しい輝かしいもの、即ち人生の美。

〔霞を餐し露を嚥み〕　仙人の生活。別乾坤に住む意。

〔紫を品し紅を評し〕　善惡美醜を評すること。論語「惡紫之奪朱也」

〔泥團〕　形骸とか肉體とかいふ意。

〔破笠裏に云々〕　破笠破簑の粗末な旅姿の裏に、脫俗超凡の無限の詩情畫趣を湛へる意。

〔銅臭兒〕　金錢の臭ひのある人。俗兒。

〔鬼嚇〕　虛勢を張つて人を

たぬと、浮世が催促するから、火宅の苦は免れぬ。東西のある乾坤に住んで、利害の網を渡らねばならぬ身には、事實の戀は讎である。目に見る富は土である。握る名と奪へる譽とは、小賢かしき蜂が、甘く釀すと見せて、針を棄て去る蜜の如きものであらう。所謂樂しみは物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。但詩人と畫客なるものあつて、飽くまで此待對世界の精華を嚼んで、徹骨徹髓の清きを知る。霞を餐し、露を嚥み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼等の樂しみは物に着するのではない。同化して其物になるのである。其物になり濟ました時に、我が樹立すべき餘地は茫々たる大地を極めても見出し得ぬ。自在に泥團を放下して、破笠裏に無限の青風を盛る。いたづらに此境遇を拈出するのは、敢て市井の銅臭兒を鬼嚇して、好んで高く標置するが爲めではない。只這裏の福音を述べて、緣ある衆生を麾くのみである。有體に云へば詩境と云ひ、

おどすこと。「鬼瞼嚇レ人」
〔具足〕 十分にそなはること。「人々具足の道」とは。詩情畫心といふやうなものは、人々が本來具有してゐる所のものだとの意。
〔微光の臭骸に云々〕 靈魂が肉體を脱け出て、超俗忘我の境に遊んだ清興を喚起し得ようとの意。
〔一瓣の花に化し云々〕 花や蝶や水仙に同化して、全くそれらの心持になりきること。アポロ神の童が燕子花となり、ナルチスが水仙となり、吾が國では賴風の妻が女郎花になり、支那では「莊周夢爲胡蝶」といふ故事がある。
〔ウォーヅオース〕 William Wordsworth(1770—1850) 十九世紀の英國の自然詩人。"The Daffodils" と題した詩がある。
〔澤風〕 萬物を育てる惠澤の風。
〔撩亂〕 レウラン。みだれ

畫界と云ふも、皆人々具足の道である。春秋に指を折り盡して、白頭に呻吟するの徒と雖も、一生を回顧して、閲歴の波動を順次に點檢し來るとき、嘗ては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れし、拍手の興を喚び起す事が出來よう。出來ぬと云はゞ生甲斐のない男である。

されど一事に即し、一物に化するのみが、詩人の感興とは云はぬ。ある時は一瓣の花に化し、あるときは一雙の蝶に化し、あるはウォーヅオースの如く、一團の水仙に化して、心を澤風の裏に撩亂せしむる事もあらうが、何とも知れぬ四邊の風光にわが心を奪はれて、わが心を奪へるは那物ぞとも明瞭に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿氣に觸るゝと云ふだらう。ある人は無絃の琴を靈臺に聽くと云ふだらう。又ある人は、知りがたく解しがたき故に、無限の域に徨徊して、縹渺のちまたに彷徨すると形容するかも知れぬ。何と云ふも皆其人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぼかんとした心裡

あふ貌。
〔耿氣〕 不滅の輝いてゐる氣。
〔無絃の琴〕 梁昭明太子の陶靖節傳「淵明不レ解ニ音律一而蓄ニ無絃琴一一張一」李白「大音自成曲、但奏無絃琴」
〔愴佪〕 センクワイ。佇む貌。
〔仙丹〕 仙人が煉つて作つた不老不死の靈藥。仙藥。
〔蓬萊〕 蓬萊島の露。
「蓬萊」は、神仙の栖む島。
「靈液」は露。嵇康、琴賦「蒸ニ靈液一以播レ雲」
〔飽和〕 一定の限度に達してゐること。

の狀態は正にこれである。

余は明かに何事をも考へて居らぬ。又は慥かに何物をも見て居らぬ。わが意識の舞臺に著しき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも云へぬ。されども吾は動いて居る。世の中に動いても居らぬ。世の外にも動いて居らぬ。只何となく動いて居る。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に對して動くにもあらず、只恍惚と動いて居る。

強ひて說明せよと云はるゝならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の聲を打つて、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて桃源の日で蒸發せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覺せぬうちに飽和されて仕舞つたと云ひたい。普通の同化には刺戟がある。刺戟があればこそ、愉快であらう。余の同化には何と同化した

〔窈然〕 深くて暗い貌。

〔潢洋〕 深く廣き貌。

〔沖融〕 和らぐこと。杜甫「和氣日沖融」

〔澹蕩〕 安らかにおだやかなさま。

か不分明であるから、毫も刺戟がない。刺戟がないから、窈然として名狀しがたい樂しみがある。風に揉まれて上の空なる波を起す、輕薄で騷々しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸迄動いてゐる潢洋たる蒼海の有樣と形容する事が出來る。只夫程に活力がない許りだ。然しそこに反つて幸福がある。偉大なる活力の發現には、此活力がいつか盡き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさう云ふ心配は伴はぬ。常よりは淡きわが心の今の狀態にはわが烈しき力の鎖磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脫却して居る。淡しとは單に捕へ難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる虞を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は、尤も此境を切實に言ひ了せたものだらう。

此境を畫にして見たらどうだらうと考へた。然し普通の畫にはならないに極つてゐる。われ等が俗に畫と稱するものは、只眼前の人

〔審美眼〕 美醜を識別する眼。

〔漉過〕 こすこと。「審美眼に漉過し」は、審美眼で美醜を識別して、美でない部分を除去して、美しい部分にのみすること。

〔淋漓〕 したゝる貌。

〔森羅〕 森羅萬象で、宇宙間に羅列する凡ての事物現象。

〔籬下〕 籬のもと。「前人の籬下に立つ」は、前人の流儀を摸倣すること。

〔主客深淺〕 主觀的と客觀的、深いと淺いと。

事風光を有の儘なる姿として、若くは之をわが審美眼に漉過して、繪絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、畫の能事は終つたものと考へられて居る。もし此上に一頭地を拔けば、わが感じたる物象を、わが感じたる儘の趣を添へて、畫布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕へたる森羅の裡に寓するのが此種の技術家の主意であるから、彼等の見たる物象觀が明瞭に筆端に迸しつて居らねば、畫を作製したとは云はぬ。己れはしか〴〵の事を、しか〴〵に觀、しか〴〵感じたり。その觀方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古來の傳說に支配せられたるにあらず。しかも尤も正しくして、尤も美しきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云ふを敢てせぬ。

此二種の製作家に主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる

〔洪纖の線〕　繪の太い線と細い線。

〔髣髴せしむ〕　ほのめかすこと。幽かに表はすこと。

外界の刺戟を待つて、始めて手を下すのは雙方共同一である。されど今、わが描かんとする題目は、左程に分明なものではない。あらん限りの感覺を鼓舞して、之を心外に物色した所で、方圓の形、紅緑の色は無論、濃淡の陰、洪纖の線を見出しかねる。わが感じは外から來たのではない。たとひ來たとしても、わが視界に横はる一定の景物でないから、是が源因だと指を擧げて明らかに人に示す譯に行かぬ。あるものは只心持である。此心持を、どうあらはしたら畫になるだらう——否此心持を如何なる具體を藉りて、人の合點する樣に髣髴せしめ得るかゞ問題である。

普通の畫は感じはなくても物さへあれば出來る。第二の畫は物と感じと兩立すれば出來る。第三に至つては存するものは只心持ち丈であるから、畫にするには是非とも此心持に恰好なる對象を擇ばなければならん。然るに此對象は容易に出て來ない。出て來ても容易

〔倘悅〕　シヤウキヤウ。うつとりすること。又は失意の貌。

〔ムード〕　Mood. 氣分「多少の生命を與ふ」とは、神韻躍動の趣きを帶ばせる意。

〔文與可〕　笑々先生・石室先生・錦江道人など稱す。宋の梓潼の人、人となり襟懐灑落、晴雲秋月の如く、最畫竹を善くし、瀟洒の姿に富んでゐた。

〔雲谷門下〕　雪舟門下の意。秋月・宗淵・周耕・楊月・周德・楊門・雪洞の徒。雪舟は歸朝後、山口の雲谷寺に住し、雲谷軒と號した。水墨を好み、風致を尚び、意を寫して形似を求めず、筆力豪放、遂に雲谷派の祖となつた。天正年間の畫家の雪谷等顔をさすのではない。然し彼も、水墨淡彩を以て、花鳥山水

に纏らない。纏つても自然界に存するものとは丸で趣を異にする場合がある。從つて普通の人から見れば畫とは受け取れない。描いた當人も、自然界の局部が再現したものとは認めて居らん。只感興のさした刻下の心持を幾分でも傳へて、多少の生命を惝恍しがたきムードに與ふれば大成功と心得て居る。古來から此難事業に全然の績を收め得たる畫工があるかないか知らぬ。ある點迄此流派に指を染め得たるものを擧ぐれば、文與可の竹である。雲谷門下の山水である。下つて大雅堂の景色である。蕪村の人物である。泰西の畫家に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多數を占めて居るから、此種の筆墨に物外の神韻を傳へ得るものは果して幾人あるか知らぬ。

惜しい事に、雪舟蕪村等の力めて描出した一種の氣韻は、あまりに單純で且つあまりに變化に乏しい。筆力の點から云へば到底此等

人物を畫き、雪舟の風趣がある。
〔大雅堂〕江戸時代、南宗畫の巨匠、池野大雅。
〔蕪村〕江戸時代の俳人・畫家。與謝蕪村。
〔神往の氣韻〕神飛び魂馳する、高尚な趣。
〔神韻〕すぐれた韻致。

〔邂逅〕めぐり逢ふこと。
〔稻妻の云々〕稻妻の如く、遮ぎるひまもなく、すばやく。

の大家に及ぶ譯はないが、今わが畫にして見ようと思ふ心持はもう少し複雜である。複雜である丈にどうも一枚のなかへは感じが收りかねる。頰杖をやめて、兩腕を机の上に組んで考へたが矢張り出て來ない。色、形、調子が出來て、自分の心が、あゝ此處に居たなと、忽ち自己を認識する樣にかゝなければならない。生き別れをした吾子を尋ね當てる爲め、六十餘州を回國して、寢ても寤めても、忘れる間がなかつたある日、十字街頭に不圖邂逅して、稻妻の遮るひまもなきうちに、あつ此所に居た、と思ふ樣にかゝなければならない。それが六づかしい。此調子さへ出れば、人が見て何と云つても構はない。畫でないと罵られても恨みはない。苟も色の配合が此心持の一部を代表して、線の曲直が此氣合の幾分を表現して、全體の配置が此風流のどれ程かを傳へるならば、形にあらはれたものは、牛であれ馬であれ、乃至は牛でも馬でも何でもないものであれ、厭はな

〔抽象的な興趣〕特殊な事物又は特殊の場合との關係を離れた面白味。

〔レッシング〕Gotthold Ephraim Lessing (1729—81) 獨逸の批評家・戲曲作家。

い。厭はないがどうも出來ない。寫生帖を机の上へ置いて、兩眼が帖のなかへ落ち込む迄、工夫したが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考へた。こんな抽象的な興趣を畫にしようとするのが、抑もの間違である。人間にさう變りはないから、多くの人のうちには、屹度自分と同じ感興に觸れたものがあつて、此感興を何等の手段かで永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすれば其手段は何だらう。

忽ち「音樂」の二字がぴかりと眼に映つた。成程音樂は、斯る時斯る必要に逼られて生れた自然の聲であらう。樂は聽くべきもの、習ふべきものであると、始めて氣が付いたが、不幸にして、その邊の消息は丸で不案内である。

次に、詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レッシングと云ふ男は、時間の經過を條件として起る出來事を、詩の本領

〔遞次〕 順次。

〔把住〕 同じ心持を保持する意。本來此語は、已に經驗した事を永く意識の中に保持して、隨時に再現し得る心的作用をいふ。
〔曠然〕 空しい意。
〔依托〕 より頼む。頼りにする。「曠然として云々」は、何等具體的事物を伴はない抽象的興趣、即ち外界の刺戟がなしに、たゞ胸裏に湧いた感興、心持をさすのである。
〔ホーマ〕 Homer 紀元前九世紀頃の希臘の詩人。
〔ヴージル〕 Virgil 紀元前一世紀頃の羅馬の詩人。

である如く論じて、詩畫は不一にして兩樣なりとの根本義を立てた樣に記憶するが、さう詩を見ると、今余の發表しようとあせつて居る境界も到底物になりさうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の狀況には、時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、遞次に展開すべき出來事の内容がない。一が去り、二が來り、二が消えて三が生るゝが爲めに嬉しいのではない。初から窈然として同所に把住する趣きで嬉しいのである。既に同所に把住する以上は、よし之を普通の言語に飜譯した所で、必ずしも時間の間に材料を按排する必要はあるまい。矢張り繪畫と同じく空間的に景物を配置したのみで出來るだらう。只如何なる景情を詩中に持ち來つて、此曠然として倚托なき有樣を寫すかゞ問題で、既に之を捕へ得た以上は、レッシングの説に從はんでも、詩として成功する譯だ。ホーマーがどうでも、ヴージルがどうでも構はない。もし詩が一種のムードをあらはすに適して居るとすれば、此ムードは時間の制限を受けて、順次に進捗する出來事の助けを藉らずとも、單純に空間的なる繪畫上の要件を充しさへすれば、言語を以て描き得るものと思ふ。

〔ラオコーン〕 Laokoon. 詩歌の限界と造形美術についての、レッシングの著作。

議論はどうでもよい。ラオコーン抔は大概忘れて居るのだから、よく調べたら、此方が怪しくなるかも知れない。兎も角、畫にしそくなつたから、一つ詩にして見ようと寫生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶつて見た。しばらくは、筆の先の尖がつた所を、どうにか運動させたい許りで、豪も運動させる譯に行かなかつた。急に朋友の名を失念して、咽喉迄出かゝつて居るのに出てくれない樣な氣がする。そこで諦めると、出損つた名は、遂に腹の底へ收つて仕舞ふ。

葛湯を練るとき、最初のうちは、ざら〳〵して、箸に手應へがないものだ。そこを辛抱すると、漸く粘着(ねばり)が出て、攪き淆ぜる手が少

し重くなる。それでも構はず箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。仕舞には鍋の中の葛が求めぬに、先方から、爭つて箸に附着してくる。詩を作るのは正に是だ。

手掛りのない鉛筆が少しづゝ動く樣になるのに勢ひを得て、彼是二三十分したら、

青春二三月。愁隨芳草長。閑花落空庭。素琴横虛堂。蠨蛸懸不動。篆煙繞竹梁。

と云ふ六句丈出來た。讀み返して見ると、みな畫になりさうな句許りである。是れなら始めから、畫にすればよかつたと思ふ。なぜ畫よりも詩の方が作り易かつたかと思ふ。こゝ迄出たら、あとは大した苦もなく出さうだ。然し畫に出來ない情を、次には咏つて見たい。あれか、これかと思ひ煩つた末、とうとう、

獨坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。會得一日靜。正知百年忙。遐懷寄何處。緬邈白雲鄕。

〔青春二三月〕明治卅一年三月の作。「春日靜堂」と題するもの。「素琴」は飾のない琴。「蠨蛸」は、あしたか蛛。「篆煙」は、篆字のやうにうねつて立つ香爐の煙。「竹梁」は、床の上方の竹で出來た框をさすのであらう。

〔方寸認微光〕俗界を超越した玲瓏たる心境をいふ。

〔會得〕悟り。

〔遐懷〕遠大なる思ひ。

〔緬邈〕メンバク。遙かに遠い貌。

〔白雲鄕〕天帝の居所。莊子「乘二彼白雲一遊二于帝鄕一」

〔神境〕神仙の栖む處、轉じて、脫俗超世の淸らかな所。靈境。

〔索然〕散らばる貌。

と出來た。もう一遍最初から讀み直して見ると、一寸面白く讀まれるが、どうも自分が今しがた入つた神境を寫したものとすると、索然として物足りない。序でだからもう一首作つて見ようかと、鉛筆を握つた儘、何の氣もなしに、入口の方を見ると、襖を引いて、開け放つた幅三尺の空間を、ちらりと奇麗な影が通つた。はてな。

余が眼を轉じて、入口を見たときは、奇麗なものが、既に引き開けた襖の影に半分かくれかけて居た。しかも其姿は、余が見ぬ前から、動いて居たものらしく、はつと思ふ間に通り越した。余は詩をすてゝ入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反對の方から、逆にあらはれて來た。振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向ふ二階の緣側を寂然として歩行て行く。余は覺えず鉛筆を落して、鼻から吸ひかけた息を、ぴ

たりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやに歸る振袖の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てゝ、重き空氣のなかに、蕭寥と見えつ隱れつする。

女は固より口も聞かぬ。傍目も觸らぬ。緣に引く裙の音さへおのが耳に入らぬ位靜かに歩行いて居る。腰から下にぱつと色づく裾模様は、何を染め拔いたものか、遠くて解らぬ。只無地と模樣のつながる中が、おのづから暈されて、夜と晝との境の如き心地である。女は固より夜と晝との境をあるいて居る。

此長い振袖を着て、長い廊下を何度往き何度戻る氣か、余には解らぬ。いつ頃から此不思議な裝ひをして、此不思議な歩行をつゞけつゝあるかも、余には解らぬ。其主意に至つては固より解らぬ。固

〔蕭寥〕もの寂しい貌。
〔裙〕裳裾。

より解るべき筈ならぬ事を、かく迄も端正に、かく迄も靜肅に、かく迄も度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらはれて消え、消えてはあらはるゝ時の余の感じは一種異樣である。逝く春の恨を訴ふる所作ならで、何が故にかくは無頓着なる。無頓着なる所作ならば、何が故にかくは綺羅を飾れる。

暮れんとする春の色の、嬋媛として、しばらく冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むる程の帶地は金襴か。あざやかなる織物は、往きつ戻りつ蒼然たる夕べのなかにつゝまれて、幽閨のあなた、遼遠のかしこへ一分毎に消えて去る。燦めき渡る春の星の、曉近くに、紫深き空の底に陷る趣である。

太玄の闇おのづから開けて、此の華やかなるすがたを、幽冥の府に吸ひ込まんとするとき、余はかう感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さゞめき暮してこそ然るべき、此の裝

〔逝く春の恨〕暮れゆく春の恨みに、青春の過ぎゆく恨みを兼ねてゐる。
〔何が故にかくは無頓着なる〕此句と次の「何が故に云々」の句とは、設疑法の詞姿を用ゐたもの。「無頓着」は、周圍の事を意に介しないこと。
〔綺羅〕あやぎぬとうすぎぬ。
〔嬋媛〕牽引の貌。
〔冥邈の戸口〕夜の戸口。冥邈（メイバク）は暗く遙かな貌。
〔幽閨〕イウゲキ。ひつそりとして靜かなこと。「幽閨のあなた遼遠のかしこ」は、暗に冥土をさしてゐる。
〔太玄の闇〕天門。
〔幽冥の府〕冥土。
〔銀燭〕明るく光る燈火。
〔春の宵云々〕蘇軾の春夜の詩「春宵一刻値千金、花有清香月有陰、歌管樓

臺辭寂々、鞦韆院落夜沈々」

〔色相世界〕 肉眼で觀取する事の出來る形相の世界。

〔暫くの幻影〕 暫時此世に居た幻の如き影の意。

〔冥漠の裏〕 「黑い所」の意。

〔閑靚〕 カンセイ。靜かにしとやかなさま。

〔おのが身の素性〕 黑い所を本來の住居としてゐる身の素性。

の、厭ふ景色もなく、あらそふ樣子も見えず、色相世界から薄れて行くのは、ある點に於て超自然の情景である。刻々と逼る黑き影をすかして見ると、女は蕭然として焦きもせず、狼狽もせず、同じ程の步調を以て、同じ所を徘徊して居るらしい。身に落ちかゝる災ひを知らぬとすれば、無邪氣の極である。知つて、災ひと思はぬならば物凄い。黑い所が本來の住居で、しばらくの幻影を、元の儘なる冥漠の裏に收めればこそ、かやうに閑靚の態度で、有と無の間に逍遙してゐるのだらう。女のつけた振袖に、紛たる模樣の盡きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほのめかして居る。

またかう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りに就いて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覺の儘で、此世の呼吸を引き取るときに、枕元に病を護るわれ等の心は嘸つらいだらう。四苦八苦を百

〔定業〕 人の產れた時から定つてゐる業報。

〔死ぬべき條件〕 斷末魔の苦しみをさすのであらう。

〔回向〕 自己の善根を他の衆生にさし向けて、其功德利益を與へる義で、讀經などして亡者の菩提を弔ふこと。

苦に重ねて死ぬならば、生甲斐のない本人は固より、傍に見て居る親しい人も、殺すが慈悲と諦められるかも知れない。然しすや〳〵と、寢入る兒に、死ぬべき何の科があらう。眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死ぬ覺悟をせぬうちに、だまし打ちに、惜しき一命を果すと同樣である。どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ斷念もして、念佛を唱へたい。死ぬべき條件が具らぬ先に、死ぬる事實のみが、有り〳〵と、確かめらるゝときに、南無阿彌陀佛と回向をする聲が出る位なら、其聲で、おうい〳〵と、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。假りの眠りから、いつの間とも心付かぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される方が、切れかゝつた煩惱に引かるゝ樣で苦しいかも知れぬ。慈悲だから、呼んで吳れるな、穩かに寢かして吳れと思ふかも知れぬ。それでも、われ〳〵は呼び返したくなる。余は今度女の姿

が入口にあらはれたなら、呼びかけて、うつゝの裡から救つてやらうかと思つた。然し夢の樣に三尺の幅をすうと拔ける影を見るや否や、何だか口が聽けなくなる。今度はと心を定めて居るうちに、すうと苦もなく通つて仕舞ふ。なぜ何とも云へぬかと考ふる途端に、女は又通る。こちらに窺ふ人があつて、其人が自分の爲にどれ程やきもき思うて居るか、微塵も氣に掛らぬ有樣で通る。面倒にも氣の毒にも、初手から、余の如きものに氣をかねて居らぬ有樣で通る。今度は今度はと思うて居るうちに、こらへかねて、雲の層が、持ち切れぬ雨の絲を、しめやかに落して、女の影を蕭々と封じ了る。

七

寒い。手拭を下げて、湯壺へ下る。

三疊へ着物を脫いで、段々を、四つ下りると、八疊程の風呂場へ出る。石に不自由せぬ國と見えて、下は御影で敷き詰めた眞中を、四尺ばかりの深さに掘り拔いて、豆腐屋程な湯槽を据ゑる。槽とは云ふものゝ矢張り石で疊んである。鑛泉と名のつく以上は、色々な成分を含んで居るのだらうが、色が純透明だから、入り心地がよい。折々は口にさへふくんで見るが別段の味も臭もない。病氣にも利くさうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。固より別段の持病もないから、實用上の價値は、かつて頭のなかに浮んだ事がない。只這入る度に考へ出すのは、白樂天の、溫泉水滑洗凝脂と云ふ句丈である。溫泉と云ふ名を聞けば、必ず此句にあらはれた樣な愉快な氣持になる。又此氣持を出し得ぬ溫泉は、溫泉として全く價値がないと思つてる。此理想以外に溫泉に就ての注文は丸でない。

すぽりと浸かると、乳のあたり迄這入る。湯はどこから湧いて出るか知らぬが、常でも槽の緣を奇麗に越して居る。春の石は乾くひ

〔御影〕　御影石。

〔溫泉水滑云々〕　白樂天の長恨歌「春寒賜レ浴華淸池、溫泉水滑洗二凝脂一、侍兒扶起嬌無レ力、始是新承二恩澤一時」華淸宮の溫泉は水が滑かで、その水で洗ぎつた白い肌を洗ふとの意。

〔夜の目を掠めて〕　夜の人目をごまかして。

〔古き世の男〕　時代から遠ざかつた純撲な自然のまゝの男。浮世の俗臭に染まぬ男。

〔虹〕　湯氣が自分と下界との間を遮斷して、自分を美しい夢幻の國に置いてゐるといつた心持で、湯氣を虹と云うたもの。

まなく濡れてあたたかに、蹈む足の心は穩やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤はす程のしめやかさであるが、軒のしづくは、漸く繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞える。立て籠められた湯氣は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さへあれば、節穴の細きを厭はず洩れ出でんとする景色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく靄は長閑に、夕餉炊く人の烟は青く立つて、大いなる空に、わが果敢なき姿を托す。樣々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇り許りは、浴するものゝ肌を、柔らかにつゝんで、古き世の男かと、われを疑はしむる。眼に寫るものゝ見えぬ程、濃くまつはりはせぬが、薄絹を一重破れば何の苦もなく、下界の人と、己れを見出す樣に、淺きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り盡すとも、此烟りから出す事はならぬ顏に、四方よりわれ一人を温かき虹の中に埋め去る。酒に醉ふと云ふ言葉はあるが

〔分別の錠前云々〕　〔分別〕を錠前に喩へたもの。一切の分別や執着から脱して、無念無想の境に入る意。

〔土左衛門〕　溺死人。

〔スキンバーン〕　Algernon Charles Swinburne (1837—1908)　十九世紀後半の英國の詩人。"Triumph of Time" と題する、男が喜んで海の中へ沈んでゆくのを詠んだ詩がある。

烟りに醉ふと云ふ語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使へぬ。霞には少し強過ぎる。只此靄に、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥當なるを覺える。

余は湯槽のふちに仰向の頭を支へて、透き徹る湯のなかの輕き身體を、出來る丈抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふわり〳〵と魂がくらげの樣に浮いて居る。世の中もこんな氣になれば樂なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはづす。どうともせよと、温泉のなかで、温泉と同化して仕舞ふ。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるものゝなかに、魂迄流して居れば、基督の御弟子となつたより難有い。成程此調子で考へると、土左衛門は風流である。スキンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往生して嬉しがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。余が平生から苦にして居た、ミレーのオフエリヤも、かう觀察すると大分美しくなる。何であんな不愉

快な所を擇んだものかと、今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り畫になるのだ。水に浮んだ儘、或は水に沈んだ儘、或は沈んだり浮んだりした儘、只其儘の姿で苦なしに流れる有樣は、美的に相違ない。夫で兩岸に色々な草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顏の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、屹度畫になるに相違ない。然し流れて行く人の表情が、丸で平和では殆んど神話か比喩になつてしまふ。痙攣的な苦悶は固より全幅の精神をうち壞はすが、全然色氣のない平氣な顏では人情が寫らない。どんな顏をかいたら成功するだらう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は、余と同じ所に存するか、疑はしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。然し思ふ樣な顏はさう容易く心に浮んで來さうもない。湯のなかに浮いた儘、今度は土左衛門の贊を作つて見る。

〔神話〕神格を中心とする物語的叙述。
〔痙攣的〕痙攣は、筋肉のひきつること。
〔贊〕人又は事物の美を稱述する辭。畫の上に書き加へるのを畫贊といふ。

雨が降つたら濡れるだろ。
霜が下りたら冷たかろ。
土のしたでは暗からう。
浮かば波の上。
沈まば波の底。
春の水なら苦はなかろ。

と口のうちで小聲に誦しつゝ、漫然と浮いて居ると、何所かで彈く三味線の音が聞える。美術家だのにと云はれると恐縮するが、實の所、余が此の樂器に於ける知識は、頗る怪しいもので、二が上らうが、三が下らうが、耳には餘り影響を受けた試しがない。しかし靜かな春の夜に、雨さへ興を添へる山里の湯槽の中で、魂迄春の温泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのは甚だ嬉しい。遠いから、何を唄つて何を彈いて居るか、無論わからない。そこに何だ

〔二が上らうが云々〕三味線の二の糸の調子が本調子に比して高いのを二上り、三の糸の調子が本調子より低いのを三下りといふ。

〔檢校〕建業とも書く。室町の中葉以後、盲人に賜うた官名。爰は、師匠といふ意。「建業とは師匠或は先生と言ふが如く、その業の成就したるをいふ家言なり」（蠟尻）

〔地唄〕その土地で唄ひ初めた唄。又は、上方唄のこと。

〔太棹〕義太夫などに用ゐる三味線で、棹の普通より太いもの。

〔長唄〕江戸時代、杵屋勘五郎の創めた俗曲の一種。

か趣がある。音色の落ち付いて居る所から察すると、上方の檢校さんの地唄にでも聽かれさうな太棹かとも思ふ。

子供の時分、門前に萬屋と云ふ酒屋があつて、そこにお倉さんと云ふ娘が居た。此お倉さんが、靜かな春の晝過ぎになると、必ず長唄の御浚ひをする。御浚ひが始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪餘りを前に控へて、三本の松が、客間の東側にならんで居る。此松は周り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、始めて趣のある恰好を形づくつてゐた。子供心に此松を見ると好い心持になる。松の下に、黑くさびた鐵燈籠が、名の知れぬ赤石の上に、いつ見てもわからず屋の頑固爺の樣に、かたく坐つて居る。余は此燈籠を見詰めるのが大好きであつた。燈籠の前後には、苔深き地を抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風を知らぬ顏に、獨り匂うて獨り樂しんで居る。余は此草のなかに、纔かに膝を容るゝの席を見出し

〔赤い手絡の時代〕圓朝に長い手絡をかける若妻時代。

〔旅の衣は鈴懸の〕長唄「勸進帳」の冒頭の文句。「鈴懸」は、山伏が衣の上に肩から掛ける麻の衣。

〔パノラマ〕Panorama 回轉畫。

て、じつと、しやがむのが此時分の癖であつた。此三本の松の下に、此燈籠を睨めて、此草の香を嗅いで、さうしてお倉さんの長唄を遠くから聞くのが、當時の日課であつた。

お倉さんはもう赤い手絡（てがら）の時代さへ通り越して、大分と世帶じみた顏を、帳場へ曝してゐるだらう。聟とは折合ひがいゝか知らん。燕は年々歸つて來て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働かしてゐるか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り離せない。

三本の松は未だに好い恰好で殘つて居るか知らん。鐵燈籠はもう壞れたに相違ない。春の草は、昔、しやがんだ人を覺えて居るだらうか。その時ですら口もきかずに過ぎたものを、今に見知らう筈がない。お倉さんの旅の衣は鈴懸のと云ふ、日毎の聲も、よも聞き覺えがあるとは云ふまい。

三味の音が思はぬパノラマを余が眼前に展開するにつけ、余は床

しい過去の面のあたりに立つて、二十年の昔に住む頑是なき小僧と、成り濟ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。

誰か來たなと、身を浮かした儘、視線丈を入口に注ぐ。湯槽の縁の、最も入口から隔たりたるに、頭を乘せて居るから、槽に下る段々は、間二丈を隔てゝ斜めに余が眼に入る。然し、見上げたる余の瞳には、まだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遶る雨垂の音が聞える。三味線は何時の間にか已んで居た。

やがて階段の上に何物かあらはれた。廣い風呂場を照すものは、只一つの小さき釣り洋燈のみであるから、此隔りでは澄切つた空氣を控ゑてさへ、確と物色はむづかしい。況して立ちあがる湯氣の、濃かなる雨に抑へられて、逃場を失ひたる今宵の風呂に、立つを誰とは固より定めにくい。一段を下り、二段を踏んで、まともに、照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも聲は掛けられぬ。

〔足音を證に之を律す〕足音の聞える聞えないといふ事だけをしるしとして、動くか動かぬかを定める意。

黑いものが一歩を下へ移した。踏む石は天鵞毬の如く柔かと見えて、足音を證に之を律すれば、動かぬと評しても差支ない。が輪廓は少し浮き上がる。余は畫工丈あつて人體の骨格に就ては、存外視覺が鋭敏である。何とも知れぬものゝ一段動いた時、余は女と二人、此風呂場の中に在る事を覺つた。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考へる間に、女の影は遺憾なく余が前に、早くもあらはれた。漲り渡る湯烟りの、やはらかな光線を一分子毎に含んで、薄紅の暖かに見える奥に、漾はす黑髪を雲とながして、あらん限りの脊丈を、すらりと伸した女の姿を見た時は、禮儀の、作法の、風紀のと云ふ感じは、悉くわが腦裏を去つて、只ひたすらに、うつくしい畫題を見出し得たとのみ思つた。

古代希臘の彫刻はいざ知らず、今の世佛國の畫家が命と頼む裸體

〔氣韻〕人物、詩文、繪畫などの氣高い趣き。

〔衣冠の世〕衣冠を着けた着飾つた人の世。

畫を見る度に、あまりに露骨な肉の美を極端迄描き盡さうとする痕迹が、あり〳〵と見えるので、どことなく氣韻に乏しい心持が、今迄われを苦しめてならなかつた。然し其折々はたゞどことなく下品だと評する迄で、何故下品であるかゞ解らぬ故、吾知らず、答へを得るに煩悶して今日に至つたのだらう。肉を蔽へば、うつくしきものが隱れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸體畫と云ふは只かくさぬと云ふ卑しさに、技巧を留めて居らぬ。衣を奪ひたる姿を、其儘に寫す丈にては、物足らぬと見えて、飽く迄も、裸體を衣冠の世に押し出さうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを忘れて、赤裸に凡ての權能を附與せんと試みる。十分で事足るべきを、十二分にも十五分にも、どこ迄も進んで、只管に裸體であるぞと云ふ感じを強く描出しようとする。技巧が此極端に達したる時、人は其觀者を強ふるを陋とする。うつくしきものを、彌が上に、うつくしく

〔滿は損を招く〕書經「滿招レ損謙レ受益、時乃天道」註に「易に所謂、天道は盈るを虧きて、而して謙に益すといふ者也」

〔放心〕うつかとりしてゐる心。

〔弊竇〕ヘイトウ。弊害の存する點。竇は穴。

〔拘々〕物にかゝはる貌。

〔齷齪〕心の狹いこと。こせつくこと。

〔嫖客〕ヘウカク。たはれを。遊治郎。

〔サロン〕Salon. 毎年五月に佛國の巴里に開かれる新作美術品展覽會。

〔娉婷〕ヘイテイ。しなやかに美しい貌。

せんと焦せるとき、うつくしきものは却つて其度を減ずるが例である。人事に就ても滿は損を招くとの諺は是が爲めである。

放心と無邪氣とは餘裕を示す。餘裕は畫に於て、もしくは文章に於て、必須の條件である。今代藝術の一大弊竇は、所謂文明の潮流が、徒らに藝術の士を驅つて、拘々として隨處に齷齪たらしむるにある。裸體畫は其好例であらう。都會に藝妓と云ふものがある。色を賣りて人に媚びるを商賣にして居る。彼等は嫖客に對する時、わが容姿の如何に相手の瞳子に映ずるかを顧慮するの外、何等の表情をも發揮し得ぬ。年々に見るサロンの目錄は、此藝妓に似たる裸體美人を以て充滿して居る。彼は一秒時も、わが裸體なるを忘るゝ能はざるのみならず、全身の筋肉をむづつかして、わが裸體なるを觀者に示さんと力めて居る。

今余が面前に娉婷と現はれたる姿には、一塵も此俗埃の眼に遮る

〔神代の姿〕自然のまゝの天眞爛漫な姿。
〔雲のなかに云々〕宋玉、高唐賦に、巫山の神女が、「旦爲二朝雲一暮爲二行雨一」とある。又、天武天皇が吉野の宮に居られた時、日暮に琴を彈かれたに、前山の岫から立ちのぼる怪雲の下に神女が表はれて、琴の調にあはせて舞をまはれたといふ傳説がある。
〔頸筋を云々〕裸體像の描寫である。

ものを帶びて居らぬ。常の人の纏へる衣裝を脱ぎ捨てたる樣と云へば既に人界に墮在する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代の姿を、雲のなかに呼び起したるが如く自然である。

室を埋むる湯烟りは埋めつくしたる後から、絶えず湧き上がる。春の夜の灯を半透明に崩し擴げて、部屋一面の虹霓の世界が濃やかに搖れるなかに、朦朧と、黑きかとも思はるゝ程の髮を暈して、眞白な姿が雲の底から次第に浮き上がつて來る。其輪廓を見よ。

頸筋を輕く內輪に、雙方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、一豐かに、丸く折れて、流るゝ末は五本の指と分れるのであらう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、又滑らかに盛り返して、下腹の張りを安らかに見せる。張る勢を後ろへ拔いて、勢の盡くるあたりから、分れた肉が平衡を保つ爲めに少しく

〔幽玄〕奥深く知り難いこと。
〔靈氛〕くしびなる氣。
〔潑墨淋漓〕潑墨は、水墨で巨點を作ること、山水を畫く法である。淋漓は、滴る貌。
〔虬龍〕みづち。角のある龍。
〔楮毫〕紙と筆。
〔三十六鱗〕龍の鱗の數。
〔淨洒々〕ありのまゝ。
〔桂の都〕月中に桂樹があるといふ傳説から、月の都即ち月の宮殿の意に言うたもの。
〔嫦娥〕羿の妻恒峨が不死之藥を盜み食つて仙となり、月中に入つて月の精となつたといふ傳説から、月の異名に用ゐる。爰は月中の仙女の意。

前に傾く。逆に受くる膝頭のこのたびは、立て直して、長きうねりの踵につく頃、平たき足が、凡ての葛藤を、二枚の蹠に安々と始末する。世の中に是程錯雜した配合はない。是程統一のある配合もない。是程自然で、是程柔らかで、是程苦にならぬ輪廓は決して見出せぬ。

しかも此姿は普通の裸體の如く露骨に、余が眼の前に突きつけられては居らぬ。凡てのものを幽玄に化する一種の靈氛のなかに、髣髴として、十分の美を奥床しくもほのめかして居るに過ぎぬ。片鱗を潑墨淋漓の間に點じて、虬龍の怪を楮毫の外に想像せしむるが如く、藝術的に觀じて申し分のない、空氣と、あたゝかみと、冥邈なる調子とを具へてゐる。六々三十六鱗を丁寧に描きたる龍の、滑稽に落つるが事實ならば、赤裸々の肉を淨洒々に眺めぬうちに神往の餘韻はある。余は此輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の嫦

〔靈龜〕萬年の壽を保つくしびな龜。
〔莽〕草叢のこと。爰は、音を借りたゞけのものか或は草むらのやうにとの意をも兼ねたものか。

娥が、彩虹の追手に取り圍まれて、しばらく躊躇する姿と眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一歩を踏み出せば、折角の嫦娥が、あはれ、俗界に墮落するよと思ふ刹那に、綠の髮は、波を切る靈龜の尾の如くに風を起して、莽と靡いた。渦捲く烟りを劈いて、白い姿は階段を飛び上がる。ホヽ、ホと鋭く笑ふ女の聲が廊下に響いて、靜かなる風呂場を次第に向へ遠退く。余はがぶりと湯を呑んだ儘、糟の中に突立つ。驚いた波が胸へあたる。緣を越す湯泉の音がさあさあと鳴る。

八

御茶の御馳走になる。相客に僧一人、觀海寺の和尚で名は大徹と云ふさうだ。俗一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室の廊下を右へ突き當つて、左へ折れた行き

〔花毯〕花模樣の毛氈。
〔唐草〕織物や彫物の模樣に、蔓草の絡み這つてゐる形を模したもの。
〔巾着切り〕掏摸。
〔婆婆氣〕利慾を離れない心。俗氣。「婆婆」は、內に諸の煩惱、外に風雨寒暑の苦を忍ばねばならぬ國土の義。この世界のこと。

留りにある。大きさは六疊もあらう。大きな紫檀の机を眞中に据ゑてあるから、思つたより狹苦しい。それへと云ふ席を見ると、蒲團の代りに花毯が敷いてある。無論支那製だらう。眞中を六角に仕切つて、妙な家と妙な柳が織り出してある。周圍は鐵色に近い藍で、四隅に唐草の模樣を飾つた茶の輪を染め拔いてある。支那では之を座敷に用ゐたものか疑はしいが、かうやつて蒲團に代用して見ると頗る面白い。印度の更紗とか、ペルシヤの壁掛とか號するものが、一寸間が拔けて居る所に價値がある如く、此花毯もこせつかない所に趣がある。花毯ばかりではない、凡て支那の器具は、皆拔けて居る。どうしても、馬鹿で氣の長い人種の發明したものとほか取れない。見て居るうちに、ぼおつとする所が尊い。日本は巾着切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細かくて、さうしてどこ迄も婆婆氣がとれない。先づかう考へながら席に着く。若い男は余とならら

んで、花毯の半を占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐つた。虎の皮の尻尾が余の膝の傍を通り越して、頭は老人の臀の下に敷かれて居る。老人は頭の毛を悉く拔いて、頰と顎へ移植した樣に、白い髯をむしや〳〵と生やして、茶托へ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思つて……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使をありがたう。わしも、大分御無沙汰をしたから、今日位來て見ようと思つた所ぢや」と云ふ。此僧は六十近い、丸顏の、達磨を草書に崩した樣な容貌を有してゐる。老人とは平常からの昵懇と見える。

「此方がお客さんかな」

老人は首肯きながら、朱泥の急須から、綠を含む琥珀の玉液を、

〔達磨〕菩提達磨のこと。支那禪宗の初祖。
〔昵懇〕じゆつこん。懇意。
〔朱泥〕支那に產する赤褐色の陶器。
〔琥珀の玉液〕琥珀色の美しい液。茶汁のこと。

三滴づつ、茶碗の底へしたゝらす。淸い香りがかすかに鼻を襲ふ氣分がした。

「こんな田舍に一人では、御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかける。

「はあゝ」と何とも蚊とも要領を得ぬ返事をする。淋しいと云へば、僞りである。淋しからずと云へば、長い說明が入る。

「なんの、和尚さん。此かたは畫を書かれる爲めに來られたのぢやから、御忙しい位ぢや」

「おゝ左樣か、それは結構だ。矢張り南宗派かな」

「いゝえ」と今度は答へた。西洋畫だと云つても、此和尚にはわかるまい。

「いや例の西洋畫ぢや」と老人は、主人役に、又半分引き受けてくれる。

〔南宗派〕支那から傳來せる繪畫の一派。王摩詰を宗とし、宋の董源が之を中興し、我國では江戸時代に、彭城百川・祇園南海等が唱道し、柳澤里恭・池大雅・與謝蕪村等が次いで起つた。

「はゝあ、洋畫か。すると、あの久一さんのやられる樣なものかな。あれは、わし此間始めて見たが、隨分奇麗にかけたのう」

「いえ、詰らんものです」と若い男が此時漸く口を開いた。

「御前何ぞ和尙さんに見て頂いたか」と老人が若い男に聞く。言葉から云うても、樣子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに見て頂いたんぢやないですが、鏡が池で寫生して居る所を和尙さんに見付かつたのです」

「ふん、さうか——さあ御茶が注げたから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗は頗る大きい。生壁色の地へ焦げた丹と、薄い黃で、繪だか、模樣だか、鬼の面の模樣になりかゝつた所か、一寸見當の付かないものが、べたに描いてある。

「杢兵衛です」と老人が簡單に說明した。

〔杢兵衛〕陶器界の傑、青木木米のこと、通稱木屋佐兵衛、俗稱八十八。尾張名古屋の人、陶工顚川の門に入つて陶業を修め、後、文政年間に、粟田小物坐町に陶窯を築いて、陶業に從事した。

「是は面白い」と余も簡單に賞めた。

「杢兵衛はどうも僞物が多くて、——その絲底を見て御覽なさい。銘があるから」と云ふ。

取り上げて、障子の方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かさうに寫つて居る。首を曲げて覗き込むと、杢の字が小さく見える。銘は鑑賞の上に於て、左のみ大切のものとは思はないが、好事者は餘程是が氣にかゝるさうだ。茶碗を下へ置かないで、其儘口へつけた。濃く、甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一しづく宛落して、味つて見るのは閑人適意の韻事である。普通の人は茶を飲むものと心得て居るが、あれは間違だ。舌頭へぽたりと載せて淸いものが四方へ散れば咽喉へ下るべき液は殆んどない。只馥郁たる匂が食道から胃のなかへ泌み渡るのみである。齒を用ゐるは卑しい。水はあまりに輕い。玉露に至つては濃かなる事、淡水の境を

〔絲底〕陶器の底の轆轤より糸で括り取つたあとの部分。

〔適意〕己の心にかなふこと。

〔韻事〕風流の遊び。

〔馥郁〕香氣の盛んな貌。

〔玉露〕最上の煎茶の名。

〔青磁〕無地に鐵分を含んだ淡藍色、又は淡藍色の釉藥をかけた磁器。

脱して、顎を疲らす程の硬さを知らず。結構な飲料である。眠られぬと訴ふるものあらば眠らぬも、茶を用ゐよと勸めたい。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かく迄薄く、かく迄規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚くべきものと思ふ。すかして見ると、春の日影は一面に射し込んで、射し込んだ儘、逃がれ出づる路を失つた樣な感じである。中には何も盛らぬがいゝ。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちと許り見せ樣と思うて出して置きました」

「どの青磁を――うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好きぢや。時にあなた、西洋畫では襖抔はかけんものかな、かけるなら一つ賴みたいがな」

かいて呉れなら、かゝぬ事もないが、此和尙の氣に入るか入らぬかわからない。折角骨を折つて、西洋畫は駄目だ抔と云はれては、骨の折り榮がない。

〔幽邃〕靜かに奥深い。幽深。

「襖には向かないでせう」

「向かんかな。さうさな、此間の久一さんの畫の樣ぢや、少し派出過ぎるかも知れん」

「私のは駄目です。あれは丸でいたづらです」と若い男はしきりに、恥しがつて謙遜する。

「その何とか云ふ池はどこにあるんですか」と余は若い男に念の爲めに尋ねて置く。

「一寸觀海寺の裏の谷の所で、幽邃な所です。――なあに學校に居る時分、習つたから、退屈まぎれに、やつて見た丈です」

「觀海寺と云ふと……」

「觀海寺と云ふと、わしの居る所ぢや。いゝところぢや、海を一日

に見下しての――まあ逗留中に一寸來て御覽。なに、此所からはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるぢやらうが」

「いつか御邪魔に上つてもいゝですか」

「あゝいゝとも、何時でも居る。茲の御孃さんも、よう、來られる。――御孃さんと云へば今日はお那美さんが見えん樣だが――どうかなされたかな、隱居さん」

「どこぞへ出ましたかな。久一、お前の方へ行きはせんかな」

「いゝや、見えませんー」

「又獨り散歩かな、ハ、、、。お那美さんは中々足が強い。此間法用で礪並（とぬみ）迄行つたら、姿見橋の所で……どうも、善く似とると思つたら、お那美さんよ。尻を端折つて、草履を穿いて、和尙さん、何を愚圖々々、どこへ行きなさると、いきなり、驚かされて、ハ、、、。お前はそんな形態（なり）で、地體どこへ、行つたのぞいと聽くと、今

〔地體〕もとより。一體全體。

〔書架〕書棚。書物を載せ置く棚。

〔紋緞子〕紋織りの緞子。緞子は練糸で織つた織物で、地が厚く、光澤が多い。

〔山陽〕賴山陽。名は襄、字は子成、通稱は久太郎。日本外史、日本政記等の著者。

〔春水〕山陽の父。廣島藩の儒者。

芹摘みに行つた戻りぢや、和尙さん少しやらうかと云うて、いきなりわしの袂へ泥だらけの芹を押し込んでハ、、、、、」

「どうも、……」と老人は苦笑ひをしたが、急に立つて「實は是を御覽に入れる積りで」と話を又道具の方へそらした。

老人が紫檀の書架から、恭しく取下した紋緞子の古い袋は、何だか重さうなものである。

「和尙さん、あなたには御目に懸けた事があつたかな」

「なんぢや、一體」

「硯よ」

「へえ、どんな硯かい」

「山陽の愛藏したと云ふ……」

「いゝえ、そりや未だ見ん」

「春水の替へ蓋がついて――」

「そりや、未だのやうだ。どれ〳〵」

老人は大事さうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。

「いゝ色合ぢやなう。端溪かい」

端溪で鴝鵒眼が九つある」

「九つ？」と和尚大に感じた様子である。

「是が春水の替へ蓋」と老人は綸子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。

「成程。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が上手ぢやて」

「矢張り杏坪の方がいゝかな」

「山陽が一番まづい様だ。どうも才子肌で俗氣があつて一向面白うない」

「ハ、、、。和尚さんは、山陽が嫌ひだから、今日は山陽の幅を懸け替へて置いた」

〔端溪〕支那廣東省肇慶府の附近から産出する良質の石、色多くは暗紫、質極めて緻密。硯材に用ゐる。轉じて硯の異名。

〔鴝鵒眼〕石上に在る圓い斑點で、外に暈がある。硯譜「端溪中之硯石、有二鴝鵒眼一、黄黑相間、品瑩可レ愛、謂二之活眼一」硯林「石之青脈者、必有レ眼、嫩則眼多、老則眼少、嫩者細潤發墨、所二以貴一レ有レ眼」鴝一は鵒に似た鳥。

〔替へ蓋〕かはりの蓋。

〔綸子〕一種の絹織物、紗綾に似て光澤があり、滑かで粘氣がある。

〔七言絶句〕七言四句で出來てゐる詩。五言四句のを五言絶句。

〔杏坪〕頼春水の弟、山陽の叔父。

〔古錦襴〕ふるく支那から渡來した金襴で、緯に平金糸を用ゐてある。

〔裝幀〕書畫の幅を表裝すること。

〔物徂徠〕荻生徂徠。德川時代の碩學。

「ほんに」と和尚さんは後ろを振り向く。床は平床を鏡の様にふきこんで、黴氣を吹いた古銅瓶には、木蘭を二尺の高さに活けてある。軸は底光りのある古錦襴に、裝幀の工夫を籠めた物徂徠の大幅である。絹地ではないが、多少の時代がついて居るから、字の巧拙に論なく、紙の色が周圍のきれ地とよく調和して見える。あの錦襴も織りたては、あれ程のゆかしさも無かつたらうに、彩色が褪せて金絲が沈んで、華麗な所が減り込んで、澁い所がせり出して、あんない調子になつたのだと思ふ。焦茶の砂壁に白い象牙の軸が際立つて、兩方に突張つて居る。手前に例の木蘭がふわりと浮き出される外は、床全體の趣は落ち付き過ぎて寧ろ陰氣である。

「徂徠かな」と、和尚が首を向けた儘云ふ。

「徂徠もあまり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善からう

と思うて」

「それは徂徠の方が遙かにいゝ。享保頃の學者の字はまづくても何處ぞに品がある」

「廣澤をして日本の能書ならしめば、われは則ち漢人の拙なるものと云うたのは、徂徠だつたかな、和尚さん」

「わしは知らん。さう威張る程の字でもないて、ワハ、、、、」

「時に和尚さんは、誰を習はれたのかな」

「わしか。禪坊主は本も讀まず、手習もせんから、なう」

「しかし、誰ぞ習はれたらう」

「若い時に高泉の字を、少し稽古した事がある。それきりぢや。それでも人に賴まれゝば、いつでも書きます。ワハ、、、。時に其端溪を一つ御見せ」と和尚が催促する。

とう〳〵緞子の袋を取り除ける。一座の視線は悉く硯の上に落ちる。厚さは殆んど二寸に近いから、通例のものゝ倍はあらう。四寸に六寸の幅も長さも先づ並と云つてよろしい。蓋には、鱗のかたに研ぎをかけた松の皮を其儘用ゐて、上には朱漆でわからぬ書體が二三字許り書いてある。

「此蓋が」と老人が云ふ。「此蓋が、只の蓋ではないので、御覽の通り、松の皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見て居る。然し松の皮の蓋に如何なる因緣があらうと、畫工としては余はあまり感服は出來んから、

「松の蓋は少し俗ですな」

と云つた。老人はまあと云はぬ許りに手を擧げて、

「只松の蓋と云ふ許りでは、俗でもあるが、是はその何ですよ。山陽が廣島に居つた時に庭に生えて居た松の皮を剝いで山陽が手づから製したのですよ」

〔廣澤〕姓は細井、名は智愼。元祿時代の書家。

〔高泉〕黃檗の高泉和尚。

成程山陽は俗な男だと思つたから、

「どうせ自分で作るなら、もつと不器用に作れさうなものですな。わざと此鱗のかた抔をぴか〳〵研ぎ出さなくても、よささうに思はれますが」と遠慮のない所を云つて退けた。

「ワハ、、、。左様よ、此蓋はあまり安つぽい様だな」と和尚は忽ち余に賛成した。

若い男は氣の毒さうに、老人の顔を見る。老人は少々不機嫌の體に蓋を拂ひのけた。下から愈硯が正體をあらはす。

もし此硯に付いて人の眼を峙つべき特點があるとすれば、其表面に現はれたる匠人の刻である。眞中に袂時計程な丸い肉が、緣とすれ〳〵の高さに彫り殘されて、是を蜘蛛の脊に象どる。中央から四方に向つて、八本の足が彎曲して走ると見れば、先には各鴛鴦眼を抱へて居る。殘る一個は脊の眞中に、黄な汁を滴らした如く煮染んで見える。脊と足と緣を殘して餘る部分は幾んど一寸餘の深さに掘り下げてある。墨を湛へる所は、よもや此塹壕の底ではあるまい。例令一合の水を注ぐとも此深さを充たすには足らぬ。思ふに水盂の中から、一滴の水を銀杓にて蜘蛛の脊に落したるを、貴き墨に磨り去るのだらう。夫でなければ、名は硯でも、其實は純然たる文房用の裝飾品に過ぎぬ。

老人は涎の出さうな口をして云ふ。

「此肌合と、此眼を見て下さい」

成程、見れば見る程いゝ色だ。寒く潤澤を帶びたる肌の上に、はつと、一息懸けたなら、直ちに凝つて、一朶の雲を起すだらうと思はれる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云はんより、眼と地の相交はる所が、次第に色を取り替へて、いつ取り替へたか、殆んど吾眼の欺かれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると、

〔匠人〕　工人。

〔黄な汁を滴らし〕　中央に在る鴛鴦眼の狀。

〔水盂〕　水鉢。盂は飲食物を盛る容器。

〔銀杓〕　銀製の柄杓。

〔一朶の雲〕　朶は垂れ下つて居るものをいふ。

紫色の蒸羊羹の奥に隱元豆を、透いて見える程の深さに嵌め込んだ様なものである。眼と云へば一個二個でも大變に珍重される。九個と云つたら、殆んど類はあるまい。しかも其の九個が整然と同距離に按排されて、恰も人造のねりものと見違へらるゝに至つては、固より天下の逸品を以て許さゞるを得ない。

「成程結構です。觀て心持ちがいゝ許りぢやありません。かうして觸つても愉快です」と云ひながら、余は隣りの若い男に硯を渡した。

「久一に、そんなものが解るかい」と、老人が笑ひながら聞いて見る。久一君は、少々自棄（やけ）の氣味で、

「分りやしません」と打ち遣つた樣に云ひ放つたが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺めて居ては、勿體ないと氣が付いたものか、又取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫で廻した後、とうとう之を恭しく禪師に返却した。禪師は篤と掌の上で見濟した末、

〔按排〕程よく物の順序を定める。

〔逸品〕すぐれた品格。

〔禪師〕禪定の宗師の義、佛教の三學、即ち戒定慧の中、禪定は殊に肝要であるから、高僧を崇めて禪師と云ふ。後、禪宗にのみ用ゐる稱號になつた。爰は禪坊主を陽に尊んで言うたもの。

夫では飽き足らぬと考へたと見えて、鼠木綿の着物の袖を容赦なく蜘蛛の脊へこすりつけて、光澤の出た所を頻りに賞翫して居る。

「隱居さん、どうも此色が實に善いな。使うた事があるかの」

「いゝや。滅多には使ひたうないから、まだ買うたなりぢや」

「さうぢやろ。此樣なのは支那でも珍しからうな、隱居さん」

「左樣」

「わしも一つ欲しいものぢや、何なら久一さんに賴まうか。どうかな、買うて來て御呉れかな」

「へ、、、。硯を見付けないうちに、死んで仕舞ひさうです」

「本當に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「二三日うちに立ちます」

「隱居さん。吉田迄送つて御やり」

「普段なら、年は取つとるし、まあ見合す所ぢやが、ことによると、

もう逢へんかも知れんから、送つてやらうと思つて居ります」

「御伯父さんは送つて呉れんでもいゝです」

若い男は此老人の甥と見える。成程どこか似て居る。

「なあに、送つて貰ふがいゝ、川船で行けば譯はない。なあ隱居さん」

「はい、山越では難義だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辭退もしない。只默つて居る。

「支那の方へ御出でゞすか」と余は一寸聞いて見た。

「えゝ」

えゝの二字では少し物足らなかつたが、其上掘つて聞く必要もないから控へた。障子を見ると、蘭の影が少し位置を變へて居る。

「なあに、あなた。矢張り今度の戰爭で——これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

〔蘭の影が少し云々〕前に「障子には植木鉢の葉蘭の影が暖かさうに寫つて居る」とあるに照應して、時間の經過を暗示したもの。

老人は當人に代つて、滿洲の野に日ならず出征すべき此青年の運命を余に語げた。此夢の樣な詩の樣な春の里に、啼くは鳥、落つるは花、湧くは温泉のみと思ひ詰めて居たのは間違ひである。現實世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔のみ住み古るしたる孤村に迄逼る。朔北の曠野を染むる血潮の何萬分の一かは、此青年の動脈から迸る時が來るかも知れない。此青年の腰に吊る長き劍の先から烟りとなつて咲くかも知れない。而して其青年は、夢みる事より外に、何等の價値を、人生に認め得ざる一畫工の隣りに座つて居る。耳そばだつれば彼が胸に打つ心臟の鼓動さへ聞き得る程近く坐つて居るかも知れぬ。運命は卒然として此二人を一堂のうちに會したるのみにて、其他には何事をも語らぬ。

〔平家の後裔云々〕浮世離れた山間の孤村といふ意を、世を忍ぶ者の子孫のみが住んでゐるといふやうに言ひなしたもの。

〔朔北の曠野〕北方の廣い野。

〔百里の平野を云々〕朔北の野に起る喊聲を潮に喩へたもの。

〔卒然〕率爾。にはか。

九

「御勉強ですか」と女が云ふ。部屋に歸つた余は、三脚几に縛り付けた書物の一冊を抽いて讀んで居た。

「御這入りなさい。ちつとも構ひません」

女は遠慮する景色もなく、つか〳〵と這入る。くすんだ半襟の中から、恰好のいゝ頸の色が、あざやかに、抽き出て居る。女が余の前に坐つた時、此頸と此半襟の對照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、六づかしい事が書いてあるでせうね」

「なあに」

「ぢや何が書いてあるんです」

「さうですね。實はわたしにもよく分らないんです」

「ホ、、、、それで御勉強なの」

「勉強ぢやありません。只机の上へ、かう開けて、開いた所をいゝ加減に讀んでるんです」

「夫で面白いんですか」

「夫が面白いんです」

「何故？」

「何故つて、小説なんか、さうして讀む方が面白いです」

「餘程變つて入らつしやるのね」

「えゝ些と變つてます」

「初から讀んぢや、どうして惡いでせう」

「初から讀まなけりやならないとすると、仕舞ひ迄讀まなけりやならない譯になりませう」

「妙な理窟だ事。仕舞迄讀んだつていゝぢやありませんか」

「無論わるくはありませんよ。筋を讀む氣なら、わたしだつて左樣します」

「筋を讀まなけりや何を讀むんです。筋の外に何か讀むものがあり

ますか」

余は、矢張り女だなと思つた。多少試驗してやる氣になる。

「あなたは小説が好きですか」

「私が？」と句を切つた女は、あとから「さうですねえ」と判然しない返事をした。あまり好きでもなささうだ。

「好きだか、嫌ひだか、自分にも解らないんぢやないんですか」

「小説なんか讀んだつて、讀まなくつたつて……」と眼中には丸で小説の存在を認めて居ない。

「それぢや、初から讀んだつて、仕舞ひから讀んだつて、いゝ加減な所をいゝ加減に讀んだつて、いゝ譯ぢやありませんか。あなたの樣にさう不思議がらないでもいゝでせう」

「だつて、あなたと私とは違ひますもの」

「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。試驗をするのは此所だと思つたが、女の眸は少しも動かない。

〔放した鷹は云々〕折角、放つた言葉が、相手を旨く釣り込めないで、そらされて終ふのを、鷹を放つて狩をする鷹狩の鷹がそれて、鳥を掴まないのに喩へたもの。

「ホ、、解りませんか」

「然し若いうちは隨分御讀みなすつたらう」余は一本道で押し合ふのを已めにして、一寸裏へ廻つた。

「今でも若い積りですよ。可哀想に」放した鷹はまたそれかゝる。すこしも油斷がならん。

「そんな事が男の前で云へれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。

「さう云ふあなたも隨分のお年ぢやありませんか。そんなに年をとつても矢張り、惚れたの、腫れたの、にきびが出來たのつてえ事が面白いんですか」

「えゝ、面白いんです。死ぬ迄面白いんです」

「おやさう。それだから畫工（えかき）なんぞになれるんですね」

「全くです。畫工だから、小説なんか初めから仕舞ひ迄讀む必要はないんです。けれども、どこを讀んでも面白いのです。あなたと話をするのも面白い。こゝへ逗留して居るうちは毎日話をしたい位です。何ならあなたに惚れ込んでもいゝ。さうなると猶面白い。然しいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初めから仕舞ひ迄讀む必要があるんです」

「すると不人情な惚れ方をするのが畫工なんですね」

「不人情ぢやありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で讀むから、筋なんかどうでもいゝんです。かうして御籤を引くやうにぱつと開けて、開いた所を、漫然と讀んでるのが面白いんです」

「成程面白さうね、ぢや、今あなたが讀んで入らつしやる所を、少し話して頂戴。どんな面白い事が出てくるか伺ひたいから」

「話しちや駄目です。畫だつて一文の價値もなくなるぢやありませんか」

「ホ、、夫ぢや讀んで下さい」

「英語でゞすか」

「いゝえ日本語で」

「英語を日本語で讀むのはつらいな」

「いゝぢやありませんか、非人情で」

これも一興だらうと思つたから、余は女の乞ひに應じて、例の書物をぽつりぽつりと、日本語で讀み出した。もし世界に非人情な讀み方があるとすれば、正にこれである。聽く女も固より非人情で聽いてゐる。

「情けの風が女から吹く。聲から、眼から、肌から吹く。男に扶け

〔漫然〕あてのないこと。

〔情けの風云々〕以下畫家の讀んでゐるのは、英國の小説家 George Meredith, の Beauchamp's Career と題する小説中の A Night on the Adriatic の一節である。

〔ヴェニス〕Veneec. 伊太利の東北隅ヴェネチヤ州の首都で、水郷として有名である。

られて舳に行く女は、夕暮のヱニスを眺むる爲めか、扶くる男はわが脈に稻妻の血を走らす爲めか。――非人情だから、いゝ加減でよ。所々脱けるかも知れません」

「よござんすとも、御都合次第で、御足しなすつても構ひません」

「女は男とならんで舷に倚る。二人の隔りは、風に吹かるゝリボンの幅よりも狹い。女は男と共にヱニスに去らばと云ふ。ヱニスなるドウジの殿樓は今第二の日沒の如く、薄赤く消えて行く。――」

「ドウジとは何です」

「何だつて構やしません。昔ヱニスを支配した人間の名ですよ。何代續いたものですかね。其御殿が今でもヱニスに殘つてるんです」

「それで其男と女と云ふのは誰の事なんでせう」

「誰だか、わたしに分らないんだ。夫だから面白いのですよ。今迄の關係なんかどうでもいゝのでさあ。只あなたとわたしの樣に、かう一所に居るところなんで、その場限りで面白味があるでせう」

「そんなものですかね。何だか船の中の樣ですね」

「船でも岡でもかいてある通りです。何故（なぜ）と聞き出すと探偵になつて仕舞ふです」

「ホヽヽヽぢや聽きますまい」

「普通の小說はみんな探偵が發明したものですよ。非人情な所がないから些とも趣がない」

「ぢや非人情の續きを伺ひませう。夫から？」

「ヱニスは沈みつゝ、沈みつゝ只空に引く一抹の淡き線となる。線は切れて點となる。蛋白石の空のなかに圓き柱が、こゝ、かしこと立つ。遂には最も高く聳えたる鐘樓が沈む。沈んだと友が云ふ。ヱニスを去る女の心は空行く風の如く自由である。去れど隱れたるヱニスは、再び歸らねばならぬ女の心に羈絏の苦しみを與ふ。男と女

〔何故と聞き出すと探偵に云々〕　小說の筋をのみ求めるは探偵小說を讀むと同じ心理で、探究的快樂の滿足である。事件の變化、局面の展開の齎す興味は、讀者の好奇心、知力的心識に滿足を與へるもの、知的快樂である。隨つて詩的快樂に乏しい。

〔羈絏の苦しみ〕　羈は馬のおもがい。絏は手綱。即ち拘束の苦しみ。

〔鳴りやまぬ弦〕鼓動の激しい女の手を鳴弦に喩へたもの。

は暗き灣の方に眼を注ぐ。星は次第に增す。柔らかに搖ぐ海は泡を濺がず。男は女の手を把る。鳴りやまぬ弦を握つた心地である。——」

「あんまり非人情でもない樣ですね」

「なに是が非人情的に聞けるのですよ。然し厭なら少々略しませうか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたより猶大丈夫です。——それからと、えゝと、少しく六づかしくなつて來たな。どうも譯し——いや讀みにくい」

「讀みにくければ、御略しなさい」

「えゝ、いゝ加減にやりませう。この一夜と女が云ふ。一夜？　と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそと云ふ」

「女が云ふんですか、男が云ふんですか」

「男が云ふんですよ。何でも女がエニスへ歸りたくないのでせう。それで男が慰める語なんです——眞夜中の甲板に帆綱を枕にして横たはりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血に似たる瞬時、女の手を確と把りたる瞬時が大濤の如くに搖れる。男は黑き夜を見上げながら、强ひられたる結婚の淵より、是非に女を救ひ出さんと思ひ定めた。かくて思ひ定めた男は眼を閉づる。——」

「女は？」

「女は路に迷ひながら、いづこに迷へるかを知らぬ樣である。攫はれて空行く人の如く、只不可思議の千萬無量——あとが、一寸讀みにくいですよ。どうも句にならない。——只不可思議の千萬無量——何か動詞はないでせうか」

「動詞なんぞ入るものですか、夫で澤山です」

「え？」

轟と音がして山の樹が悉く鳴る。思はず顏を見合す途端に、机の上

〔一輪挿〕一二輪の花の枝を挿す小さい花瓶。

〔滿泓〕泓は淵。「滿泓の水云々。」滿泓の水が底から地盤の搖ぎと共に動く、水面に映ずる櫻の花が水と共に卷舒曲伸する。然かも本來の面目を失はない。之は正に欲我を脱した悟入の姿である。非人情の態度である。超俗的な襟懷である。「雁過寒潭雁去不止影」といふ菜根譚の句を思ひ出す。

の一輪挿に活けた椿がふら〳〵と搖れる。

「地震！」と小聲に叫んだ女は、膝を崩して余の机に靠りかゝる。御互の身軀がすれ〳〵に動く。キ、、と鋭どい羽搏をして、一羽の雉子が藪の中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云ふ。

「どこに」と女は崩したからだを擦り寄せる。余の顔と女の顔が觸れぬ許りに近付く。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさはつた。

「非人情ですよ」と女は忽ち坐住居を正しながら屹と云ふ。

「無論」と言下に余は答へた。

岩の凹みに湛へた春の水が、驚いて、のたり〳〵と鈍るく搖いでゐる。地盤の響きに、滿泓の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、碎けた部分は何所にもない。圓滿に動くと云ふ語があるとすれば、こんな場合に用ゐられるのだらう。落ち付いて影を蘸してゐた山櫻が、水と共に、延びたり縮んだり、曲がつたり、くねつたりする。然しどう變化しても矢張り明らかに櫻の姿を保つてゐる所が非常に面白い。

「こいつは愉快だ。奇麗で、變化があつて。かう云ふ風に動かなくつちや面白くない」

「人間もさう云ふ風にさへ動いて居れば、いくら動いても大丈夫ですね」

「非人情でなくちや、かうは動けませんよ」

「ホ、、、大變非人情が御好きだこと」

「あなただつて嫌な方ぢやありますまい。昨日の振袖なんか……」と言ひかけると、

「何か御褒美を頂戴」と女は急に甘へる樣に云つた。

〔機先を制す〕敵の氣勢を挫く爲に好機會を利用して、敵に先んじて行動すること「機先」は事の起らんとする矢先。

「何故です」

「見たいと仰つたから、わざ〳〵見せて上げたんぢやありませんか」

「わたしがですか」

「山越えをなさつた畫の先生が、茶店の婆さんにわざ〳〵御頼みになつたさうで御座います」

余は何と答へてよいやら一寸挨拶が出なかつた。女はすかさず、

「そんな忘れつぽい人に、いくら實をつくしても駄目ですわねえ」

と嘲ける如く、恨むが如く、又眞向から切りつける如く、二の矢をついだ。段々旗色がわるくなるが、どこで盛り返したものか、一旦機先を制せられると、中々隙を見出しにくい、

「ぢや昨夕の風呂場も全く御親切からなんですね」と際どい所で漸く立て直す。

女は默つてゐる。

〔竹影掃階塵不動〕竹影は婆娑として階上に搖れてゐる。塵は竹影の動くに委せつゝ依然として動かない。矢張非人情の態度である。明鏡止水の趣である。

〔圓滿な動き方〕相手が大徹和尚の額の文句を唱へたから、自分も相手の動き方に應じて大徹の話を持出すのをいふ。

〔西洋畫で唐紙を云々〕西洋畫で唐紙に書いての意。

「どうも濟みません。御禮に何を上げませう」と出來る丈先へ出て置く。いくら出ても何の利目もなかつた女は、何喰はぬ顏で大徹和尚の額を眺めて居る。やがて、

「竹影掃階塵不動」

と口の中に靜かに讀み了つて、又余の方へ向き直つたが、急に思ひ出した樣に、

「何ですつて」

と、わざと大きな聲で聞いた。その手は喰はない。

「其坊主にさつき逢ひましたよ」と地震に搖れた池の水の樣に圓滿な動き方をして見せる。

「觀海寺の和尚ですか。肥つてるでせう」

「西洋畫で唐紙をかいてくれつて、云ひましたよ。禪坊さんなんてものは隨分譯のわからない事を云ひますね」

「それだから、あんなに肥れるんでせう」
「それから、もう一人若い人に逢ひましたよ。……
「久一でせう」
「えゝ久一君です」
「よく御存じです事」
「なに久一君丈知つてるんです。其外には何にも知りやしません、口を聞くのが嫌な人ですね」
「なに、遠慮して居るんです。まだ子供ですから……」
「子供つて、あなたと同じ位ぢやありませんか」
「ホ、、、、さうですか。あれは私しの從弟ですが、今度戰地へ行くので、暇乞ひに來たのです」
「こゝに留つてゐるんですか」
「いゝえ、兄の家に居ります」

「ぢや、わざ〳〵御茶を飲みに來た譯ですね」
「御茶より御白湯の方が好きなんですよ。父がよせばいゝのに、呼ぶものですから、癇癪が切れて困つたでせう。私が居れば中途から歸してやつたんですが……」
「あなたは何處へ入らしつたんです。和尚が聞いて居ましたせ。ヲ一人散歩かつて」
「えゝ鏡の池の方を廻つて來ました」
「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」
「行つて御覽なさい」
「畫にかくに好い所ですか」
「身を投げるに好い所です」
「身はまだ中々投げない積りです」
「私は近々投げるかも知れません」

【往生】人が死後、極樂淨土、兜率天等に往つて生れること。轉じて俗に死ぬこと。

【茫然】氣を喪ふ貌。ぼんやりした貌。

【熊笹】禾本科に屬する多年生の植物。高さ五六尺。細くて强靱、枝毎に長楕圓狀披針形の葉が掌狀に着生する。觀賞用として庭園に植ゑる。

餘りに女としては思ひ切つた冗談だから、余は不圖顏を上げた。女は存外慥かである。

「私が身を投げて浮いて居る所を――苦しんで浮いてる所ぢやないんです――やす〳〵と往生して浮いてる所を――奇麗な畫にかいて下さい」

「え？」

「驚いた、驚いた、驚いたでせう」

女はすらりと立ち上る。三歩にして盡くる部屋の入口を出るとき、顧みてにつこりと笑つた。茫然たる事多時。

十

鏡が池へ來て見る。觀海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向ふの山へ登らぬうちに、路は二股に岐れて、おのづから鏡が池の周圍となる。池の縁には熊笹が多い。ある所は、左右から生ひ重なつて、殆んど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まつて、どこで終るか一應廻つた上でないと見當がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁程よりあるまい。只非常に不規則な形で、所々に岩が自然の儘水際に横はつて居る。緣の高さも、池の形の名狀し難い樣に、波を打つて、色々な起伏を不規則に連ねて居る。

池をめぐりては雜木が多い。何百本あるか勘定がし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いて居らんのがある。割合に枝の繫まない所は依然として、うららかな春の日を受けて、萠え出でた下草さへある。壺菫の淡き影が、ちらりちらりと其間に見える。

日本の菫は眠つて居る感じである。「天來の奇想の樣に」と形容した西人の句は、到底あてはまるまい。かう思ふ途端に余の足はとまつた。足がとまれば、厭になる迄そこに居る。居られるのは、幸福

【壺菫】萬葉卷八「山吹の咲きたる野邊の壺菫この春の雨に盛りなりけり」花の形狀が開き切らないで當んでゐる形であるから、「つぼ」といふのであらうと。

【天來の奇想】人間界に生じたものでなく、天から降り來つた奇拔な思想。

〔風馬牛〕 左傳「君處ニ北海一、寡人處ニ南海一、唯是風スル馬牛不ニ相及一也」とあつて、風は放の意。さかりがついて牝牡相誘ふ牛馬のこと、轉じて遠く隔つて相關せざる義。陸游の詩「醉自醉倒愁自愁、愁與レ酒如ニ風馬牛一」

〔塵界〕 塵寰。けがれた世。

〔平等觀〕 萬物は凡て皆平等であると觀ずること。

〔無邊際〕 はてしないこと。

〔群小〕 多くの小人。

〔タイモン〕 Timon 紀元前五世紀の末頃のアゼンスの人、非常に人間を嫌ひ獨り高塔に蟄居してゐた。

な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追ひ立てる。都會は太平の民を乞食と間違へて、掏摸の親分たる探偵に高い月俸を拂ふ所である。

余は草を茵に太平の尻をそろりと卸した。こゝならば、五六日斯うしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣ひはない。自然の有難い所はこゝにある。いざとなると、容赦も未練もない代りには、人に因つて取り扱ひをかへる樣な輕薄な態度は、少しも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものは、いくらでも居る。冷然として古今帝王の權威を風馬牛し得るものは自然のみであらう。自然の德は高く塵界を超越して、絶對の平等觀を無邊際に樹立して居る。天下の羣小を麾いて、徒らにタイモンの憤りを招くよりは、蘭を九苑に滋き、蕙を百畦に樹ゑて、獨り其裏に起臥する方が遙かに得策である。世は公平と云ひ無私と云ふ。左程大事なものならば、日に千

〔蘭を云々〕 離騷「余既滋ニ蘭之九畹一兮、又掛ニ蕙之百晦一」畹は、田二十畝。晦は畝に同じ、蕙は蘭の一種共に香草、だから賢人君子に喩へる。爰は世俗に交つて功名を爭ふよりも、自然の裡に自適するの勝れる意。

〔千人の小賊〕 公平を害し無私を毒する利慾の徒。

〔雨龍〕 龍の類で角なく、とかげに似てゐる。

〔寂滅〕 一切の相をはなれ無爲寂靜になつた境界。轉じて、死ぬこと。

人の小賊を戮して、滿圃の草花を彼等の屍に培養ふがよからう。

何だか考が理に落ちて一向つまらなくなつた。こんな中學程度の觀想を煉りに、わざ〳〵鏡が池迄來はせぬ。袂から烟草を出して寸燐をシユッと擦る。手應はあつたが火は見えない。「敷島」のさきを付けて吸つてみると、鼻から烟が出る。なるほど、吸つたんだなと漸く氣がついた。寸燐は短い草のなかで、しばらく雨龍の樣な細い烟を吐いて、すぐ寂滅した。席をずらせて、段々水際迄出て見る。余が茵は天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温い水につくかも知れぬと云ふ間際でとまる。水を覗いて見る。

眼の屆く所は左迄深さうにもない。底には細長い水草が、往生して沈んで居る。余は往生と云ふより外に形容すべき言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知つて居る。藻の草ならば誘ふ波の情を待つ。百年待つても動きさうもない、水の底に沈められた此水草は、動く

〔功德〕　他に惠みの及ぶ善行。

〔三莖〕　莖は細い物を數へるに用ゐる詞。杜甫「數莖白髮那拋得」

〔南無阿彌陀佛〕　六字の名號である。光明無量壽命無量の覺體に歸命する意で、即ち阿彌陀佛の救濟を賴み奉るといふ意。

べき凡ての姿勢を調へて、朝な夕なに、弄らるゝ期を、待ち暮し、待ち明し、幾代の思を莖の先に籠めながら、今に至る迄遂に動き得ずに、又死に切れずに、生きて居るらしい。

余は立ち上がつて、葉の中から、手頃の石を二つ拾つて來る。功德になると思つたから、眼の先へ、一つ拋り込んでやる。ぶく〳〵と泡が二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えたと、余は心のうちで繰り返す。すかして見ると、三莖程の長い髮が慵げに搖れかゝつて居る。見付かつてはと云はぬ許に、濁つた水が底の方から隱しに來る。南無阿彌陀佛。

今度は思ひ切つて、懸命に眞中へなげる。ぽかんと幽かに音がした。靜かなるものは決して取り合はない。もう拋げる氣も無くなつた。繪の具箱と帽子を置いた儘右手へ廻る。

二間餘りを爪先上がりに登る。頭の上には大きな樹がかぶさつて

〔森閑〕　ひつそり。物音が聞えず寂しいさま。

〔妖女〕　なまめいて美しい女。

〔嫣然〕　美しい貌。巧みに笑ふ貌。

〔雨中の梨花〕　白樂天、長恨歌「玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶レ雨」と、楊貴妃の憂に沈んださまを詠んだ句がある。

身體が急に寒くなる。向ふ岸の暗い所に椿が咲いて居る。椿の葉は綠が深すぎて、萱見ても、日向で見ても、輕快な感じはない。ことに此椿は、岩角を奥へ二三間遠退いて、花がなければ、何があるか氣のつかない所に、森閑としてかたまつてゐる。其花！　一目勘定しても無論勘定し切れぬ程多い。然し眼が付けば是非勘定したくなる程鮮かである。唯鮮かと云ふ許りで、一向陽氣な感じがない。ぱつと燃え立つ樣で、思はず、氣を奪られた後は、何だか凄くなる。あれ程人を欺す花はない。余は深山椿を見る度にいつでも妖女の姿を連想する。黑い眼で人を釣り寄せてしらぬ間に、嫣然たる毒を血管に吹く。欺かれたと悟つた頃は既に遲い。向ふ側の椿が眼に入つた時、余は、えゝ、見なければよかつたと思つた。あの花の色は唯の赤ではない。眼を醒す程の派出やかさの奥に、言ふに言はれぬ沈んだ調子を持つてゐる。悄然として萎れる雨中の梨花には、只憐れ

な感じがする。冷やかに艶なる月下の海棠には、只愛らしい氣持ちがある。椿の沈んで居るのは全く違ふ。黑ずんだ毒氣のある、恐ろしい味を帶びた調子である。此調子を底に持つて、上部はどこ迄も派出に裝つてゐる。然かも人に媚ぶる態もなければ、ことさらに人を招く樣子も見えぬ。ぱつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜を、人目にかゝらぬ山陰に落ち付き拂つて暮してゐる。只一眼見たが最後！　見た人は彼女の魔力から金輪際、免るゝ事は出來ない。あの色は只の赤ではない。屠られたる囚人の血が、自から人の眼を惹いて、自から人の心を不快にする如く、一種異樣な赤である。

見てゐると、ぽたり赤い奴が水の上に落ちた。靜かな春に動いたものは只此一輪である。しばらくすると又ぽたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつたまゝ枝を離れる。枝を

〔金輪際〕　大地の下、百六十萬由旬を隔てゝ金輪がある、その金輪に接する處をいふ。即ち大地の最底部。轉じて、どこまでも、底の底までの意。

〔見てゐると云々〕　椿の花が或間隔を置いては落ちる、それにつれて思想が展開する、漸層的の書振りである。

離れるときは一度に離れるから、未練のない樣に見えるが、落ちてもかたまつて居る所は、何となく毒々しい。又ぽたり落ちる。あゝやつて落ちてゐるうちに、池の水が赤くなるだらうと考へた。花が靜かに浮いて居る邊は今でも少々赤い樣な氣がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、區別がつかぬ位靜かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだらうかと思ふ。年々落ち盡す幾百輪の椿は、水につかつて、色が溶け出して、腐つて泥になつて、漸く底に沈むのかしらん。幾千年の後には此古池が、人の知らぬ間に、落ちた椿の爲めに、埋もれて、元の平地に戻るかも知れぬ。又一つ大きいのが血を塗つた、人魂の樣に落ちる。又落ちる。ぽたり〳〵と落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いてゐる所をかいたらどうだらうと、思ひながら、元の所へ歸つて、又烟草を呑んで、ぼんやり考へ込む。

温泉場のお那美さんが、昨日、冗談に云つた言葉が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪にのる一枚の板子の樣に搖れる。あの顏を種にして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落す。椿が長へに落ちて、女が長へに水に浮いてゐる感じをあらはしたいが、夫が畫でかけるだらうか。かのラオコーンには――ラオコーン抔はどうでも構はない。原理に背いても、背かなくても、さう云ふ心持さへ出ればいゝ。然し人間を離れないで、人間以上の永久と云ふ感じを出すのは、容易な事ではない。第一顏に困る。あの顏を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つては凡てを打ち壞して仕舞ふ。と云つて、無暗に氣樂では困る。一層ほかの顏にしてはどうだらう。あれか、これかと、指を折つて見るが、どうも思はしくない。矢張お那美さんの顏が一番似合ふ樣だ。然し何だか物足らない。物足らないと迄は氣が付くが、どこが物足らないかゞ、吾ながら不明である。從つて自己の想像でいゝ加減に作り易へる譯に行かない。あれに嫉妬を加へたら、どうだらう。嫉妬では不安の感が多過ぎる。憎惡はどうだらう。憎惡は烈し過ぎる。怒？怒では全然調和を破る。恨？　恨みでも春恨とか云ふ、詩的の者ならば格別、只の恨みでは餘り俗である。色々考へた末、仕舞ひに漸くこれだと氣が付いた。多くある情緒のうちで、憐れと云ふ字のあるのを忘れて居た。憐れは神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情である。お那美さんの表情のうちには、此憐れの念が少しもあらはれて居らぬ。そこで物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、此情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが畫は成就するであらう。然し――何時それが見られるか解らない。あの女の顏に普段充滿して居るものは、人を馬鹿にする微笑と、勝たう、勝たうと焦る八の字のみである。あれ丈では、とても物にならない。

〔咄嗟〕トツサ。ひと息。
〔衝動〕何等の目的を意識せず、善惡を思考せず、心的生活の一般系統とは無關係に、外界の刺戟に應じて迅速に動く行爲。
〔眉宇〕眉のあたり。額をいふ。

〔逞しい〕勢の壯んなこと。

がさり〳〵と足音がする。胸裏の圖案は三分の二で崩れた。見ると、袖筒を着た男が、背へ薪を載せて、熊笹のなかを觀海寺の方へわたつてくる。隣りの山からおりて來たのだらう。

「よい御天氣で」と手拭をとつて挨拶する。腰を屈める途端に、三尺帶に落した鉈の刄が、ぴかりと光つた。四十恰好の逞しい男である。どこかで見た樣だ。男は舊知の樣に馴々しい。

「旦那も畫を御描きなさるか」余の繪の具箱は開けてあつた。

「あゝ。此池でも畫かうと思つて來て見たが、淋しい所だね。誰も通らない」

「はあい。まことに山の中で……旦那あ、峠で御降られなさつて、嘸御困りで御坐らしたろ」

「え？　うん御前はあの時の馬子さんだね」

「はあい。かうやつて薪を切つて城下へ持つて出ます」と源兵衛は

〔不憫〕いとほしいこと。可哀相なこと。

荷を卸して、其上へ腰をかけて、煙草入を出す。古いものだ。紙だか革だか分らない。余は寸燐を借してやる。

「あんな所を毎日越すなあ大變だね」

「なあに、馴れてゐますから――夫に毎日は越しません。三日に一返、ことによると四日目位になります」

「四日に一返でも御免だ」

「アハ、、、。馬が不憫ですから四日目位にして置きます」

「そりやあどうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハ、、、」

「それ程でもないんで……」

「時に此池は餘程古いもんだね。全體何時頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？　どの位昔から？」

「なんでも餘つ程古い昔から」

「餘つ程古い昔からか。成程」
「なんでも昔、志保田の嬢様が、身を投げた時分からありますよ」
「志保田つて、あの温泉場のかい」
「はあい」
「御嬢さんが身を投げたつて、現に達者で居るぢやないか」
「いんにえ。あの嬢さまぢやない。ずつと昔の嬢様が」
「ずつと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」
「なんでも、餘程昔の嬢様で……」
「その昔の嬢様が、どうして又身を投げたんだい」
「その嬢様は、矢張り今の嬢様の様に美しい嬢様であつたさうなが
な、旦那様」
「うん」
「すると、ある日、一人の梵論字が來て……」

〔梵論字〕梵論梵論。笠を被り尺八を吹いて人の門戸に物を乞ふ修行者。虚無僧。普化僧。

「梵論字と云ふと虚無僧の事かい」
「はあい。あの尺八を吹く梵論字の事で御坐んす。其梵論字が志保田の庄屋へ逗留して居るうちに、その美しい嬢様が、其梵論字を見染めて——因果と申しますか、どうしても一所になりたいと云うて、泣きました」
「泣きました。ふうん」
「所が庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は聟にはならんと云うて。とうとう追ひ出しました」
「其虚無僧をかい」
「はあい。そこで嬢様が、梵論字のあとを追うてこゝ迄來て、——あの向ふに見える松の所から、身を投げて——とう〳〵、えらい騒ぎになりました。其時何でも一枚の鏡を持つてゐたとか申し傳へて居りますよ。夫で此池を今でも鏡が池と申しまする」

〔因果〕原因と結果。一切の諸法は因果の法則に依つて生滅變化するをいふ。轉じて前世の惡因の結果といふ意で、不仕合の意に用ゐる。
〔聟にはならん〕聟にすることは叶はぬ。